

元軍人トレーナー

ユウ0725

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

他にも投稿していますが、忙しいのとネタ切れで投稿できていないので、こちらも続くかは分かりません。

目

次

| | | | |
|------|-----|----|------|
| 閑話休題 | その2 | 1 | 第1話 |
| 21話 | 2 | 3 | 第2話 |
| 20話 | 20 | 5 | 第3話 |
| 閑話休題 | 21 | 7 | 第4話 |
| 閑話休題 | 22 | 10 | 第5話 |
| 閑話休題 | 23 | 12 | 第6話 |
| 閑話休題 | 24 | 15 | 第7話 |
| 閑話休題 | 25 | 18 | 第8話 |
| 閑話休題 | 26 | 21 | 第9話 |
| 閑話休題 | 27 | 24 | 第10話 |
| 閑話休題 | 28 | 28 | 第11話 |
| 閑話休題 | 29 | 31 | 第12話 |
| 閑話休題 | 30 | 34 | 第13話 |
| 閑話休題 | 31 | 37 | 第14話 |
| 閑話休題 | 32 | 40 | 第15話 |
| 閑話休題 | 33 | 43 | 第16話 |
| 閑話休題 | 34 | 46 | 第17話 |
| 閑話休題 | 35 | 49 | 第18話 |
| 閑話休題 | 36 | 52 | 第19話 |
| 閑話休題 | 37 | 55 | 55 |
| 閑話休題 | 38 | 59 | 62 |
| 閑話休題 | 39 | 65 | 68 |

閑話休題（その3）

| | |
|---------------|----|
| 22話 | 96 |
| 23話 | 93 |
| 24話 | 91 |
| 25話 | 88 |
| ミーティング後 | 85 |
| 26話（1日目午前） | 82 |
| 26話（1日目午前）その式 | 79 |
| 26話（1日目午前）その参 | 77 |
| 26話（午後） | 74 |
| | 71 |

第1話

ウマ娘プリティーダービー

生前、かなりやり込んだスマホゲームの一つだ。
そして、俺はその世界に転生をした。

まあ、死んだ理由は戦争だ。

情勢が怪しくなりだして、出兵したのはいいのだが、気が付いたら死んでいた。

多分、爆弾か何かだろう。

ま、身の上の話しさは、ここまでにして、話した通りでウマ娘の世界に転生した。

年齢はそのままで、特殊な能力として「神眼」が備わっていた。
これは、相手の状態、調子、得意、不得意、適正、その他諸々が一目見ただけで分かるという優れものだ。

ちなみにデメリットは情報量が多くすぎると、脳が処理落ちして鼻血が出ちゃうんだけど、最近は慣れてきて、鼻血を出すことがなくなつてきた。

まだ、トレーナーではないけどね。

これから試験なのさ。

受かるといいけどね。

周りを見ると、かなり真剣な表情をして、過去問を読んでいる人や、何やら呪文のようなことを呟いている人がいる。

怖いから近寄らんどこ

殆どがスーツで着てる人なんだけど、俺だけ私服なんだよね。

だからかな、周りからは「なんやコイツ」みたいな目で見られている。

……仕方ないじやん。

転生した時は、ボロボロの軍服だつたし。

手持ちにあつたお金でなんとか私服買って、ボロボロだつた軍服を捨てて、ようやくまともに見えるようになつたんだからさ。

ま、元軍人だから軍服着てたらスイッチ入っちゃうし、それだつたら私服の方が楽だからな。

そもそも、勉強してないから受かるか分からぬしね。
相変わらず変人を見るような目で見てくるしね。

「そこのスーツを着てない君」

後ろから声をかけられた。

俺は反射的に一步跳躍して、間合いを取る。

「俺に何か用かな？」

そして、左手を右鎖骨あたりまで持っていく。

「ふと目に止まつたから声をかけてみたんだが、警戒させてしまつたかな？」

「いや、驚いただけだから気にしないでくれ。」

そうは言うも、10年間の癖は中々抜けない。

「む、そうか。周りに残つているのは君だけだからな。試験に遅れるといけないだろう？」

周りを見渡すと、周りには人がおらず、残つているのは俺だけだった。

「知らせててくれてありがとな。」

俺は試験会場に向けて歩き出す。

途中で俺は、足を止めて相手に伝える。

「あ、そうだ。」

「何かな？」

「全身に疲労が溜まつてるね。いい加減に休息を取らないと腱の炎症や骨折を引き起こすよ。あと、まだ身体が硬いね。しつかりと解さないから疲労が抜けにくい。しつかりと柔軟をしなさい。休息の日には3日くらいはとつた方がいい。」

「え？」

「身体に気をつけたまえよ。皇帝サマ。」

「え、待つてくれ！」

俺は静止の声も聞かずに会場に向けて歩き出した。

第2話

会場に着いて筆記試験を受けたが、

『なんだこれは？ 現役の時の将官昇任試験に比べたらかなり簡単じゃないか。この程度であれほど頭を悩ますほどか？』

俺は全て解答し、20分経つたので会場外へ離席した。

いやあ、あの時の試験官の顔は忘れられねえな。

目を点にして、解答と俺を交互に見てくるもんだからさ。笑いを堪える事に必死だつたよ。

ま、問題が間違っているのもあつたから、丁寧に間違いを書き直しておくると同時に、正しい答えを記入して、理由付けまでしておいたからね。

「ふむ、次までやる事が無くなつてしまつたな。」

転生した身であるから、携帯もないから時間を潰せない。持ち物は、嗜好品として軍服に入つていたタバコと、スキットルに半分くらい入つてお酒くらいだ。

「一服するか。」

しかし、未知の場所でもあるから場所が分からぬ。「職員に場所を聞きたいが、見当たらないな。」

とりあえず、目の当たりにした者に尋ねるとしよう。

そう考えていると、丁度通り掛かつた。

「すまないが、そこの眼鏡をかけた人

「ん、私？」

いかにもキャリアウーマンみたいな雰囲気の人声を掛けた。

「イエス！ ちょっとお尋ねしたいのですが、お時間は宜しいかな？」

「ええ、少しなら構わないわ。」

こちらに向き合つてくれる。

「助かる。えつと、喫煙場所を探しているのだが、教えてもらえないだろうが？」

「喫煙場所だつたら、隣の職員棟の屋上にあるわよ。」

「職員棟か。受験者は立ち入れますか？」

「受験者？ もしかして貴方受験者なの？」

驚いたように聞いてくる。

まあ、試験会場から30分しか経つてないからな。

「ああ、誤解しているようですが、試験は受けましたし、問題は全て解答欄を埋めましたよ。ついでに間違ってる所もあったので、書き直して、理由付けまでしておきました。」

「え？」

この人もかいな……。

「それで、話を戻しますが、受験者も入れますか？」

「え、ええ。試験期間中は、解放はされてるから行けるはずよ。」「丁寧にありがとうございます。」

俺は一言お礼を言つて歩き出す。

そして、すれ違いに一言伝えた。

「オタクの皇帝サマ、そろそろ休ませてあげないと身体壊れちまうよ。左足首と、股関節右側を触診して確かめてみることだな。」

その言葉に目を見開く。

「貴方は一体!?」

「ただのお節介だよ。ま、騙されたと思って、やつてみるといいさ。学

園最強チームのトレーナーサマ。」

俺は右手を振りながら、喫煙所に向かつた。

「アレがただの受験者？ 冗談じやない。」

そのつぶやきは誰にも聞き取れず消えた。

第3話

「理事長これを。」

緑色のスーツの女性からある答案用紙が渡された。

「驚愕！ 何なのだこの点数は？！」

理事長は答案用紙を見て驚く。

何故なら回答がほぼ満点なのに対し、気付かないような間違いも修正してあるからだ。

「こんな点数これまでで見たことがありません。」

「肯定。その通りだ。どうしたらこんな点数が取れるのかが不思議なくらいだ。」

「試験官によると、開始20分でこれを提出して退出したそうです。」

「何と！」

さらに驚く。

何故なら、このトレセン学園の試験は合格倍率がかなり高いうえ、試験問題もかなりの難易度となつていて、年間でトレーナーになる者は、ほんの数名程度である。

その問題を開始20分で解き、かつ間違いまで書いて出すことなど前代未聞だったのだ。

「その者の写真はあるか？」

「こちらに。」

緑のスーツの女性が出したのは、試験会場に私服で現れた彼であつた。

しかも、学園の監視カメラで撮つたにも関わらず、カメラに目線を向けているというオマケ付きである。

「この者は監視カメラの場所が分かつているのか！？」

「恐らくは気付いていると思います。」

「何と未恐ろしい。」

その時、ドアがノックされる音が聞こえた。

「理事長、シンボリルドルフです。」

「許可！ 入つていいぞ！」

入ってきたのは、彼にアドバイスを受けたウマ娘だった。

「理事長、相談があるのですが。」

彼女は、真剣な表情で向き合う。

「本日、試験を受けに来た男性について尋ねたいのですが。」

「確認！ 男性というのはこの者か？」

先程の写真を見せる。

ルドルフは目を見開く。

「肯定。やはりか。」

「何故、彼だと分かったのですか？」

「この答案用紙を確認してみよ。」

渡されたのは彼が書いた答案用紙だ。

目を通して行く度に、表情が硬くなる。

「これは、所属しているトレーナーも分からぬ知識がありますね。」

「肯定！ その通りだ！ ここに来るとということは、彼と接触したと

考えられる！ 彼について分かることを教えてほしい！」

ルドルフは目を閉じ考える。

「私が背後から声を掛けたら、間合いを取つて、左手を右鎖骨あたりまで持つていつてました。」

その言葉に2人が目を見開く。

「それは本当なのですか？」

「確認！ 確実に間合いを取つたのだな？」

「はい、間違ひなく取りました。」

緑のスーツの女性と理事長は目を合わせる。

「たずな。」

「はい。間違ひないと思います。」

2人は目を合わせて頷いた。

「どうしたのですか？」

ルドルフだけは、ついていけないようだ。

「解答！ 彼の名前は恐らく偽名だろう。そして、正体は……。」

「正体は？」

「間違ひなく、元軍人だ。」

第4話

言われた通りに行くと、喫煙所があつた。

俺はタバコを取り出し、火をつける。

「はあー。」

紫煙が口から吐き出される。

「喫煙所がここだけというのも難儀だと思わないか？ 色物チームのトレーナーさんよ？」

俺は双眼鏡でグラウンドを見る人物に声を掛けた。

「生憎と、俺は吸わないもんでね。」

そう言つて、咥えていたアメを俺に見せる。

「そら失礼した。」

俺はもう一度煙を吸い込んで吐き出す。

「あんた若え割に様になつてんな。一体いつから吸い始めたんだ？」

マジマジと見ながら尋ねてくる。

「ふむ、20歳からと答えたら信じるか？」

俺は尋ねる。

「信じはしねえが、納得はする。」

「なるほどな。」

俺はそのトレーナーを観察する。

「なるほどねえ。」

「何がだ？」

トレーナーは訝しげに聞いてくる。

「あんた。いや、沖野トレーナーと呼ばせてもらおうか。」

俺は首から掛けている沖野トレーナーの身分証を指差しながら言う。

「どんだけ目が良いんだよ。羨ましいを通り越して呆れるぜ。」

「まあ、目だけはかなり良い方だからな。」

俺はまた、紫煙を吐き出して答える。

「沖野トレーナーがかなり優秀なのは見ただけで分かつた。腹が立つよな？ 個性の強い奴らを納得させて、かつ効率の良い練習も考えな

きやいけない。でも、そのメニューは理解されない。」

「へえ？」

双眼鏡を目から外しこちらを向く。

「しかも、殆どが言うことを聞かないときた。自主性に任せてるのは良いとするが、もうちょっと気を付けないと内部分裂を起こしかねないぞ？」

「それは意見か？ それとも忠告か？」

俺は薄ら笑いを浮かべて答える。

「どつちに取つてもらつてもいいさ。ただし、頭の片隅には置いておいた方が良いかもな。」

俺は最後に紫煙を吸い込み吐き出す。

そして、火を揉み消す。

「アドバイス、ありがとよ。」

俺は薄らと笑う。

「ま、俺も過去に癖の強い奴らを育てたりしたからな。」

俺は思い出しながら苦笑する。

思い出すのは殆どが俺の部下たちだけだ。かなりの曲者ばかりだつたなあ。

キレて上官殴り飛ばした奴、遅刻の常習犯、命令違反の常習犯、性格の変わったトリガーハッピー、1日の3分の2は寝てる狙撃手、フリーフォールをパラシユート無しで飛び降りるアホ、熱中したら銃で撃たれても気付かない爆弾魔とか。

あれ？

思い返してみると曲者というより、問題児ばっかじやね？

「そうか。お前にもそういう時期があつたんだな。」

「あるとも！ こう見えて20代後半なんだぜ？」

トレーナーは驚いた顔をする。

「ま、アドバイスと思ってくれよ？」

俺は去ろうとするが、トレーナーに腕を掴まれる。

「俺何かした？」

「お前、受験生だよな？」

少しトレーナーの目つきが鋭くなる。

「そうだが？」

「すまないが、理事長室にお呼び出しだぜ。」

トレーナーは、受信したメールの画面を俺に見せてきた。

内容は、『至急！ この者を見つけた者は私の所まで連れてきて欲しい！』とあり、ご丁寧に写真まで添付してあつた。

「なるほどね。では、案内を頼めるかな？」

第5話

「理事長連れてきました。」

俺は、沖野トレーナーに連れられて理事長室に来た。

「やあ、どうもです。」

入つてから見渡すと、試験前と後に話し掛けた2人がスタンバイしていた。

そしてさらに奥に、緑のスーツの女性と小ちやい子供がいた。
「じゃ、俺は戻るぜ。」

沖野トレーナーは理事長室から退出した。

「へえ？　俺に何か用ですかい？」

俺は、少し前傾姿勢で質問する。

何故なら過去に直立て話を聞くようにしているからねえ。
ダイレクトヒットしたからねえ。

それ以来は、少し前傾姿勢で話を聞くようにしているからね。
「歓迎！　試験の後からずっと君を探していた！」

小さな身体からは想像できない大きな声だ。

「へえ？　受験者の1人である俺をですかい？」

俺は目を細める。

「それは、俺のこの目に関する事？　それとも経歴？」

そう尋ねた瞬間、表情が固まった。

「なるほど、後者の方だったか。」

俺は、手を頭の後ろに組み、背を向ける。

「理事長とその秘書さんは気付いたみたいだねえ？　先に言つとくけど、元とつくよ。だからさ、ここをどうこうすることはないよ。」

「確認！　それは誠か!?」

「おう。俺は引退したからさ、働き場所を探してたら、いい給料に対応、職場環境も悪くない。そして、育成となつたら俺の得意分野でね。だつたら応募しかないと思つて、応募しただけだからな。」

そう説明するも、秘書さんの方が納得してないなあ。

「秘書さんよ？　納得してませんなんあ？」

「それは……はい。元とはいえ、あのテストの結果が信じれませんので、何故ですか？」

痛いとこついてくるなあ。
ま、いいか。

「元将官クラスだからかなあ。」

「はい?」

あれ、聞こえなかつた?

「もう一度言おうか?」

「いえいえ! 聞いていましたが、信じられなかつたので!」

あらら、そうだつたのか。

でもさ、このままでいいの?

「お2人様? そこの2人はほつたらかしで大丈夫だつたのですかい?」

「あ」

フリーズしたままのトレーナーと皇帝サマがいた。

「お2人サン?」

俺は目の前で手を振るが反応なし。
仕方ないな。

俺は目の前で柏手を打つ。

「はつ!」

お、覚醒した。

「お2人サン、ダイジョーブですかい?」

「すまない。話しつついていけず、固まつてしまつた。」

皇帝サマは眉間に手を当てて皺を寄せる。

「私も同じよ。」

こちらは額に手を当てて、大きなため息を吐く。

「そんなにキャパオーバーすることありました?」

俺は尋ねる。

「「「どの口がいうんだ!!」」

4人からどやされました。

びえん

第6話

約30分位説教を受け、今は今後のことについて話し合っている。

「まず、貴方の本名を教えてください。」

俺は目を見開く。

「お、偽名つてのが分かつたのか？」

「調べましたから。」

「こわっ！」

まさしく緑の悪魔じやないか！

「こわっ！ まあ、偽名を書いた俺も悪いんだけどさ。」

俺は軍属の時に使っていたドッグタグを懐から取り出す。

「ほい。『榊龍一』これが本名さね。」

そして、そのタグを理事長に渡す。

「確認！ しかし、それ以外にはないのか？」

痛いとこ突いてきやがる。

「なら、ほいっと。」

俺は運転免許証を渡す。

「うむ、確認した！」

「最初からそつちを出せば良いのでは？」

「そゝ、うるさい。」

女性トレーナーに釘を刺す。

「証明できるのはこれぐらいかな？」

俺は腕を組む。

「分かりました。理事長どうされますか？」

「承認！ 本日よりトレーナーになつてもらう！」

な、なんデスと？

「そんな簡単に決めて良いのですか!?」

「不要！ テストの結果はともかく、ウマ娘達のコンディションや能力も分かるみたいだから、人材としては手放したくない！」

理事長は扇子を広げる。

そこには『決定』と書かれてある。

いや、『決定』よりも俺は、『激アツ』の方が……おつと、それだと
パチンコになつてしまふな。

「しかし、実績を上げてもらわなくてはならない！」

「だつたら、実績が燻つてる奴を何かG1レースで優勝させましょ
うか？」

「「「はい?!」」」

4人の目が点になる。

「いや、軍属の時は教育部隊の長をしてましてね？　こと育てること
に関しては、変態やら神やら言われてたのですよ？」

その結果生まれたのが、部下であり、チームでもある変態共だがな。
「君、いくらなんでも無謀ではないか？」

「うるさい、ポンコツ皇帝、略してポン帝、ダジャレのセンスはいまひ
とつ。」

「そ、そこまで言うか?!」

ポン帝の耳が垂れる。

言いすぎた感は否めないが、事実だから仕方ない。

「ん？　何故、そこまで分かる？」

そこだよ、メッチャ気付いて欲しかったのは！

「俺は相手を見れば、性格、癖、調子、能力がほぼ分かる。そして、そ
こから分析して、更に何を行動するかどうかを予測する。まあ、外し
たことはないから、俺の前では隠し事は不可能とだけ言つておこう。」

「「「え？　こわつ!?」」」

ぴえん

「こういうことだから、育成に関しては右に出る者はいないと思うが
ね？」

女性トレーナーは頭を押さえる。

「沖野くんと違つた変態だわ。」

「心外だな。あんな人の足、しかも女性の足をペタペタ触るやつなん
かと一緒にしないで欲しい。」

「だから！　なんでここまで分かるのよ!!」

そりやあ、見たから。

「実績が必要なら、貴方のチームの燻つてる1人を俺に預けてみませ
んか？」

「え？」

「1週間いや、4日で仕上げてみましょう。そして、レースをしましょ
う。」

俺は相手を真っ直ぐ見据えて答えた。

第7話

「私のチームにいるはずが『サイレンスズカ』…え？」

俺は言葉を被せる。

「サイレンスズカ伸び悩んでるだろ？」

「……。」

いや、伸び悩んではいると言うよりは、適正じゃないが正しいかな？

「勝つレースをさせるのは良いが、適性が合わないと元も子もないぜ？ 特に、サイレンスズカは逃げしか取れないはずだが？」

「貴方に何が分かるのよ。」

「いや何にも。だが、言えるのは、何事も徹底的な管理をして、そこに何が残る？ 彼女らは一人で戦う。下地を作るのは当たり前だが、最後に鎧を削った時信じれるのは何だ？」

俺は4人に問う。

「トレーナーでしようか？」

緑の悪魔が答える。

「違う。最後は己自身だ。」

4人は目を点にしている。

「何だ？ その時に『トレーナーが言つたからこうする』って難しいことを考えるのか？ 敵はそこにいるんだぞ？ 俺は軍属だつたからな。俺から言わせると、トレーナーは『指揮官』でウマ娘達が『兵士』だ。」

4人は顔を顰める。

「そう顔を歪めるなよ。俺的に分かりやすくしてんだからよ。……話を戻すぞ。トレーナーは、ウマ娘に適切なトレーニングを示して、適性のあるレースに出る。簡単に言うと指揮官が指示を出して、兵士に戦わせるのと同じだ。」

4人は真剣に話を聞いている。

「そこでだ。指揮官が無能で、兵士に適切な武器を持たせなかつたらどうなる？」

「壊滅か全滅」

「そう！ その通り！ だから、指揮官は兵士一人に対して、分析をし

て適切な配置を行う。これが、お前らに例えるとトレーニングとレー
スだ。」

俺は答える。

「じゃあ、兵士に苦手な武器、苦手な配置にしたら、どう言いたいか分
かるよな？」

「……。」

トレーナーは黙るしかなかつた。

「いや、お前さんを無能と言つてる訳ではないよ。ただ、本人達にも意
見を聞かないと何も始まらないぜ？ なにせ、学園最強のチームだろ
？ だつたら、1人の適性くらいは見極めないと後々誰かを潰してし
まうよ？」

俺はそう締め括つた。

「さて、これだけ啖呵を切つたんだ。何が証明しなくてはな。」

俺は理事長室の窓際による。

グラウンドが見渡すことができるベストなポジションだ。

「じゃあ、誰にしようかね？」

俺は咳く。

4人は不思議そうに俺を眺めている。

隣には理事長がちよこんと並ぶ。

「じゃ、あそこの『似非アイドル』と『小柄なピンク』にしようかね。」

俺は不敵な笑みを浮かべる。

「なつ！？」

それに驚くトレーナーとポン帝

「確認！ 本当に彼女達で良いのか!?」

理事長まで驚いている。

「もう見たから知つてる。勝てたら更に楽しいだろうな？」

俺はトレーナーに向かい合う。

「さて、この挑戦4日後に受けて貰えるか？」

「勿論よ。後、名乗りりが遅れたわ東条ハナよ。」

「じゃ、おハナさん。俺が負けたら、アンタのサブにでもなろう。」

「貴方が勝つたら？」

「1週間だけ俺のサブになつて貰おう。何故なら、トレーナーの業務は初だからな。色々と教えて貰おうか。」

俺は挑戦的な笑みを浮かべる。

「分かつたわ。覚悟してなさい。」

「そこなくてはな。」

俺たちは握手を交わした。

第8話

あの後から理事長室に2人を呼んで貰つた。

「説明！ 彼女達は『ハルウララ』と『スマートファルコン』だ！」

俺は2人を頭から足まで見る。

「ほう！ ほうほう！」

やつぱり目に狂いはなかつた。

「ファルコだよ～！ ウマドル目指して頑張つてま～す！」

「うつらら～！ ハルウララだよ～！」

2人とも元気がいいな。

「ハルウララちよつといいか？」

「ん？ なに～？」

俺はハルウララの腕、足を軽く触つてみる。

「あははつ！ くすぐつたいよお！」

ハルウララは身を捩る。

「あつと、すまないな。」

俺は触るのを止める。

「ちよつと全身に力を入れてみてくれるか？」

「いいよ！ はいっ！」

今度は触らずに、ハルウララの周りを一周する。

「もういいぞ。」

ヤバい。

こんなに身体が頑丈な奴初めて見た。

「次はスマートファルコンいいか？」

「本当は、お触りは厳禁だけどいいよ。」

次はスマートファルコンの手足を軽く触る。

「よし、全身に入れてくれ。」

「は～い！」

スマートファルコンの周りを一周する。

ふと、気になつたことがあつた。

「スマートファルコン、足を少し突くぞ？」

俺は脹脛を軽く突く。

「ふむ、なるほどねえ。もういいぞ。」

俺は少し考える。

2人ともポテンシャルは悪くはないが、何せバランスが悪すぎる。
「ほうほう。2人のことは良く分かった。」

「確認！ 2人を4日だけ受け持つというのに変更はないか？」

理事長は再度聞いてくる。

「勿論。こんな逸材を4日だけでも受け持てるのは嬉しい。」「了承！ では、こちらを渡しておく！」

手渡されたのはトレーナーバッジだった。

「ん、では練習に入る前に、2人に自分の身体のことをしつかり理解してもらう為に少し話すぞ。」

2人は真剣な眼差しになる。

理事長と秘書は耳を傾けている。

「2人とも適性はダートだ。しかし、スマートファルコンについては芝も走らないこともないが、今回はダートに趣を置いてもらう。何故なら時間が足りないからだ。4日という短い時間の中で、2人には勝てるようになつてもらう。」

「はい！」

「いい返事だ。まずは、スマートファルコンからだ。」「ファルコから？」

「おう。お前は足の左右のバランスが悪い。バランスが悪いということは、レース後半に足が疲れて伸びなくなる。あと、腕の筋力が足りてない。だから、この2点を重点的において練習する。」「はい！」

「次は、ハルウララ。」

「うつらら～！」

「ハルウララは、走り方が悪いのと、気持ちが足りていない。」「え？」

「走り方は改善できるが、気持ちの面は自分自身と向き合うか、命の危機に襲われて、生存本能を全開にするかしかない。だから聞く。走る

だけで満足か?」

「……ウララは勝ちたい。」

「よし! それを聞けただけで十分だ。4日間は本当にキツい練習になるとと思うが、付いてきてくれるか?」

「勿論!」

2人は真っ直ぐに俺を見つめてきた。
ならば俺も本気でやつてやる。

「よし、俺もちょっとスイッチを入れますかね。」

普段から仕事いや、任務をしていた時の空気を滲ませる。

雰囲気が変わったのが分かったのか2人は怯え、理事長と秘書は冷
や汗を流している。

「これが仕事の時の空気だ。2人とも生存本能を全開にしたら、これ
以上の鋭い空気になるぜ。」

2人は頷くだけだ。

「よし、これより任務を開始する。2人ともFollow me」

「い、Y e s s i r!」

第9話

グラウンドに着き、2人には軽いアップをしてもらう。

「さて、最初のメニューは決まつてるがこなせるかねえ？」

「終わりましたあ！」

2人が元気よく伝えにきた。

「よし、そしたら、スマートファルコンについては、これを付けてジョギング2時間で、ハルウララはこのラダーをやつてもらう。」

俺は重りがついた足と腕のサポーターをスマートファルコンに渡し、30メートルはあるラダーをハルウララに渡した。

「重りについては、足の方が左右と重りが違うからな。重い方を左足につけてやるように。あと、ラダーの方は俺が決めるタイムをクリアすることだ。」

「了解!!」

2人は拙いながらも揃つて敬礼した。

「ははっ！ 僕はもう軍属じゃないからな。ちなみに、トレーナーではなく、教官と呼んでくれ。お前達の正式なトレーナーではないからな。」

「はい！ 教官！」

元気がいいな。

「よし、それでは初め!!」

2人はすぐに準備をしてメニューに取り掛かつた。

スマートファルコンの方は順調そうだが、それがいつまで持つかねえ？

ハルウララは、まあ、うん、予想してたけどね。
タイム、タイムつと。

……。

「遅い。」

つい本音が出てしまった。

足運びが悪いのか、途中で躊躇かけてる。

「ハルウララ、ちょっと来な。」

俺はハルウララを近くに呼ぶ。

「な、何かなあ？」

「そう怯えるな。ちよつとしたコツをな。」

俺はハルウララの手を取り、肩周りの柔軟を行う。

「ハルウララちよつと座つて。」

俺はハルウララを座らせて、足首の柔軟を行う。

そしてトドメに、股関節の柔軟をする。

俺はハルウララと足を合わせて、お互に開脚の状態になり、ハルウララを引っ張る。

「き、教官！　い、痛い！」

ちよつと、いや、かなり良心が痛むが心を鬼にする。

「テメエが遅いのは股関節の周りが硬すぎるとからだ！　股関節を柔くすれば短距離なら2秒から3秒は早くなるんだぞ！」

ハルウララは涙目になりながら柔軟をする。

5分くらい伸ばした後、ラダーに戻らせる。

「よし、もう一度やつてみろ。」

「は、はいい。」

ハルウララはラダーに戻つて早速始める。

しかし、さつきまでの動きとは打つて変わつて、スマーズに進み、かつ違和感がない。

「え？」

ハルウララ自身もかなり驚いている。

「そら見ろ。」

時間もさつきより断然早い。

目標タイムよりも10秒速い。

「やつた！　やつた！　教官やつたよ！」

ハルウララは嬉しそうに飛び跳ねる。

「良くやつた。ただし、まだ油断するなよ？　どんどんステップアツプしていくからな？」

「分かつた！」

「取り敢えずは、ハルウララは休憩だ。」

「うん！」

さてさて、スマートファルコンの方は？

30分くらいしか経つてないのにバテすぎだろ。

「スマートファルコン！ 姿勢を崩さずに走れ！」

「む、無理いぐ！」

「ほう、喋る余裕もあるときた。姿勢を崩さずに走るか、俺に最大限の威圧をされながら走るのどつちがいいんだ？」

「し、姿勢を崩さずに走りますうぐ！」

スマートファルコンは姿勢をすぐさま戻して走り出した。

「次、姿勢を崩したら、問答無用で追いかける。」

「は、はいぐ！」

さて、ハルウララは次のステップに移れる。

「よし、次、ハルウララについては、瞑想だな。」

「え？」

「瞑想だ。絶対に寝るなよ。座禅を組んで、心を無にして、己の本能と向き合うんだ。それをモノにできれば、お前は更なる高みに行ける。」「よく分からぬけど、やつてみる！」

ハルウララは座禅を組んで瞑想し出した。

よし、これで己と向き合うことが出来れば、下手な相手には負けないようになる。

それよりも、さつきから俺に向けられる視線をどうにかするかねえ。

第10話

「そこに隠れてるの出てきな。」

……出でこないか。

「言葉を掛けられて、尻尾が逆立つたせいでモロバレなんだが？」

茂みから出てきたのは、小柄な黒っぽいのだつた。

「うん、出てくれただけでもいいよ。前の職場だと鉛玉か、刃物が飛んできたからね。」

「ヒツ！」

そう言つたら怯えられた。

……解せぬ。

「喋るのが苦手なら喋らなくていい。首を振つてくれるだけでいいから。」

黒は頷く。

「こちらを見てたのは、強くなりたいからか？」

頷く。

「ふむ、今は手一杯でお前を見る余裕がない。」

そう言うと、耳と尻尾が垂れる。

やべ、言葉の選び方間違えたか？

でも、事実だしなあ。

「だが、アドバイスだけは言える。」

尻尾は垂れたままだが、耳はピンッと上を向く。

「お前、他のウマ娘以上の強心臓の持ち主だな。だつたらそれを生かしたトレーニング、主に超過負荷のスタミナトレーニングを行つた方がいい。」

コクコクと頷く。

「ただし、トレーニングをするなら、トレーナーかトレーニング仲間に見てもらいながら実施することだ。何故なら、そのトレーニングをすることによつて、スピード、スタミナは勿論のこと、ここぞっていうときの気持ちの強さの向上もなる。ただし、怪我をしやすいトレーニングだ。1人でやると確実に怪我をする。だから、トレーナーかト

レーニング仲間と必ずすることだ。強心臓のお前なら、すぐに効果が出てくる。」

真剣な眼差しでこちらを見返すが、その瞳の中には不安が宿つている。

「はっ、周りの目なんて気にするな。逆にそう言つてきた奴には睨み返してやるんだよ。『テメエが私を決めるな』って言う目をしてな。付け加えると『ぶつ殺すぞ』位の睨みでいいぞ。」

「ええ!」

「実践してみた方がいいか?」

何処かに手頃なのいないかなあ?

周りを見渡す。

お、いたいた。

鹿毛の長い髪のウマ娘がいた。

「おーい、そこのちよつと来てくれないか?」

俺は大声で呼ぶ。

気付いたのかこちらにやつてくる。

「はい、なんでしようか?」

「ちよつと、この黒にお手本として見せてやりたいんだけどいいか?」

「はい、私でよければ。」

許可も出たことだしやるか。

「最初に謝つておく。かなり怖いと思うから。」

「え?」

返答は聞かずに、俺はかつての理不尽な上官を思い出して、一気に睨みを効かせる。

「ヒツ!!」

萎縮してしまった。

これを受けた鹿毛のウマ娘は、目を見開き、耳はペたりと、尻尾は丸め、呼吸するのを忘れているようだ。

やり過ぎたと思いつつ、肩に手をおく。

すると、ビクッと跳ねた後、ゆっくりと呼吸し出した。

「悪かったな。非常に怖かつたな。」

安堵からか涙目になりながら震え出す。

「ほ、本当に死んだと思いました……。」

「ああっ！ 頼むから泣かないでくれ！ 僕が10割で悪かつたから！」

とりあえず鹿毛のウマ娘を日陰に座らせる。

「黒、これはやり過ぎたけど、相手を怯ませる事くらいはできる。レースにも生きてくる。」

「できるか分からぬけど、練習してみるね！」

「そうか。」

「あのね、アドバイスありがとう！ またね、お兄様！」

「はいはい、ん？ お兄様?!」

もう走り出した後だつたから呼び止めることは出来なかつた。

それよりもこつちだ。

「本当に悪かつたな。」

「…………もう怒つてはいません。」

いやいや、ガツツリ怒つてんじやん。

まあ、全面的に俺が悪いが。

「怖かつたですが、今後の為にはなりました。」

「ん？」

「レースの時、アレよりは弱いですが、ああいつたものを向けられることはありましたので、あれ以上に強い圧はこれから先向けられることはないと思つてます。」

今後の為ねえ？

「為にはなりましたが、これは別です。貸し1つと言うことにしておきます。」

それはそれで助かるが。

「アレくらいの圧は、コイツらが4日後にできるつて言つたら？ 何を馬鹿なことをつて目で見てるな？」

「まあ、練習を見ていくといい。今は腰が抜けて立たないだろ？」

俺はもう一度ハルウララとスマートファルコンを見る。

ハルウララは眠つてはいないようで、しつかりと瞑想している。

良きかな良きかな。

しつかりと己と向き合つて いるようでいいことだ。

スマートファルコンは……アイツ姿勢を崩しやがったな？

「ちょっと行つてくる。」

俺は鹿毛のウマ娘の横から立ち上がる。

「スマートファルコン！ 姿勢を崩すなつて俺、言つたよなあ！！」

「すみません～！」

「宣言通り、全力で追いかける。」

俺は殺氣を全開にして追いかけ出した。

第11話

俺は短く息を吐き、目を閉じる。

そして、一気に限界まで殺氣を撒き散らす。

近くでトレーニングしていたウマ娘は、震え上がりこちらを向く。

それにわき目も触れずスマートファルコンに向かって走り出す。

「はあはあ……えつ？ ぴいやあああ！」

スマートファルコンは、悲鳴を上げながら弾かれたように走り出す。

「テメエ！ 一度はないぞ！」

「ゞ、ごめんなさいいい！」

俺は全力で追いかける。

ウマ娘と人間の身体の違いの関係上勿論追いつくはずは無いのだが、後ろからの全力のプレッシャーと走っていた疲れにより、徐々にスマートファルコンは追いつかれ出す。

「なんで!? なんで引き離せないの!？」

「テメエの走りが崩れてるからだ！ さつさと立て直せ！ しばらくぞ！」

「ひいいい!!」

それを見ていたウマ娘達はのちにこう言つた。

『ファルコが勝つ様になつたのは見てて嬉しいけど、あの練習だけは絶対に、生涯やりたくない。』

追いかけ出して、1時間が過ぎる頃、タイマーの音が鳴つた。

「お、終了か。」

俺は追いかけるのを止めて、殺氣を収める。

「はつ、はつ、はつ、し、死ぬかと思つたあ……。」

辛うじて逃げ切つたスマートファルコンは、ダートということも忘れて、仰向けに倒れた。

「うん、最後は良かつた。その感覚を忘れるなよ？ 忘れたら、分かつてるよな？」

「わ、分かりましたあ……。」

俺は大きく深呼吸をすると、私服の上着を脱ぎ、タンクトップ1枚になる。

「あつつく。全く、久々に体を動かした。ちよつと疲れただけで済むなんてなんてなんていう化少量の汗が頬を伝う。

((アレだけ追いかけて、少し疲れただけで済むなんてなんていう化け物よ!!))

スマートファルコンは10分休憩して、その後にトレーニング開始だ。それまでに呼吸を整えておけ。」

「は、はいいく。」

さてと、ハルウララの方はどうだ？

寝てはなが、雑念が多いな。

「ハルウララ、雑念が多いぞ。頭を何も考えずに真っ白にしろ。余計なことを考えるんじゃないぞ？」

「はい！」

そう伝えると、さつきよりはマシな瞑想ができる様になつていた。

「よし。それを続ける。寝たら分かるよな？」

「は、はいっ！」

若干、身体が跳ね上がつたが、すぐに瞑想に移つた。

ハルウララは暫くは大丈夫だな。

スマートファルコン、次は中距離2000mを走つてもらう。その時には重りを外してよし。だが、俺の判断でまた装着してもらうからな。」

「はい！ フアルコ頑張ります！」

「よし、その意気だ！」

スマートファルコンは重りを外し出す。

スマートファルコン、重りを外すということは、着けていた時に比べて身体がかなり軽く感じるはずだ。その時に注意するのは足だ。」

「足？」

「そうだ、足が後ろに流れやすくなる。これは、足が後ろに流れる事により、折角地面を蹴つて力を伝えているのに、その力が全て流れて、推進力が落ちてしまう。これに注意して走れ。いいな？」

「はい！」

「よし、そしたらスタート位置につけ。タイムを計測する。」

「よし！ ファルコいつきま～す！！」

スマートファルコンはしつかりと足首の柔軟をして、スタート位置についた。

「それでは始める。」

スマートファルコンは構える。

「用意、スタート!!」

その瞬間、スマートファルコンの姿が一瞬消えた。
そして、盛大に地面に顔面からダイブしていた。

第12話

ズザザツと顔で5m程滑つた後、上がつていた足が地面にパタリと落ちた。

この光景にグラウンドにいたウマ娘達の空気が凍つた。
その中で俺は大爆笑していた。

「フハハハハ！ あんな漫画みたいなの初めて見た！」

腹を押さえて大爆笑

笑いながらもスマートファルコンに近付く。

「ふふつ、大丈夫か？ ふつ！」

笑いが止まらないまま、一応聞いてみる。

よく見ると、あの盛大な滑り方も恥ずかしいのか、地面に伏した状態でプルプル震えている。

そして、ガバッと起き上がりつたかと思うと、

「ぶええええん！」

ウマドルを目指してる奴とは思えない泣き声と表情をして泣き出した。

しかも、鼻出血付きで……。

今度から、スマートファルコンじゃなくて、マチカネファルコンにでもするか？

「だから言つただろうに。足には気をつけろよつてさ。」

何故あんな転び方になつたのかは理由がある。

1つ目は、重りを外した事による急激な重さの減少

2つ目は、足の流れによる空回り。

3つ目は、走り出しが前傾姿勢過ぎたところだ。

「お前さあ、まだ重りを外した身体に慣れてないのに、スタートから前傾姿勢で行き過ぎなんだよ。」

おそらく走り出したスマートファルコンは驚いたはずだ。

前傾姿勢過ぎたばかりに、足が地面じゃなくて空中を蹴つたんだから。

確かにコイツの持ち味は素晴らしい反射神経によるスタートダツ

シユだが、それも現在の身体に慣れている状態でようやくできる芸当だ。

それをほんの2時間程度重りを付けて走つただけで、こんなに容易く崩れてしまう。

「スマートファルコン、もう一度だ。スタートは少し上体を起こして走れ。そして、走つてゐる間に身体が慣れてきたら徐々に前傾姿勢にしていけ。そしたら重りをつけて走つた2時間の意味がわかる。」

スマートファルコンは領くとゲート位置に戻る。

勿論、その時に鼻血を拭う事と、泥を払う事も忘れずにしている。さつきまで鼻血ブーで泣いていたのとは違うよなあ。

そしてスマートファルコンはゲートに入り構える。

「よし、準備はいいな？」

「はいっ！」

「用意、スタート!!」

ゲートが開かれ、スマートファルコンは飛び出した。

さつきよりは上体を起こした形で走つている。

そして、すぐに第1コーナーに入つた。

速度が慣れてきたのか、ほんの少しづつではあるが、上体が倒れてきている。

そして、第2コーナーを曲がり終わる所で少し加速した。

直線に入るとさつきスタートで転んだとは思えない走りでどんどん加速していく。

さて、1000m通過タイムはどうかな？

「は？　いや、え？」

ありえねえ……。

俺が追い回しただけでこんなに変わるもんか？

呆気に取られていると、第4コーナーを曲がり終わつて直線に入つた所だった。

そして、そこから更に加速する。

「いやいやいや、まだ上がるのかよ。」

そしてスマートファルコンはゴールした。

俺はスマートファルコンの所に行く。

「足、なんともないのか？」

「うん！ ファルコは大丈夫だよ！」

しつかりと見てみるが異常はない。

「タイムだが、入り1000mが57秒8だ。そして、ゴールは1分5
8秒7だ。」

第13話

ありえないスピードに対して疑問に思い、少しスマートファルコンの全身を見てみると、練習前に比べて筋肉量が増しているのが確認できた。

え？

この短期間でこんなに伸びるのか？

「筋肉量が増えてる。何故だ？」

「ウマ娘は人間と比べて、代謝が何倍も高いのですよ。」

後ろから声を掛けられた。

この声は……。

「緑の悪魔」

「な、何ですかそれ！　し、失礼ですよ!?」

あの秘書がいた。

「んで、何か用事でも？」

「いいえ、どの様な練習をされているのかと思って見学に。」

「左様ですかい。」

「あと、緑の悪魔ではなく、『駿川たづな』と言います。」

「分かりましたよう。で、練習を見ての感想は？」

俺は尋ねてみる。

「正直、これで4日後に間に合うのかというのが本音です。」

それを言われた瞬間に、俺はさつきのストップウォッチを投げ渡す。

「それ、2時間追い回したスマートファルコンがさつき出した記録だ。これを見ても間に合わないと言うのか？」

秘書たづなは、ストップウォッチを見て少し焦っている。

「え？　今出したのですか？」

「そうだ。ついでに目で見たが、何処にも異常はない。しかも、筋肉量が練習前に比べてかなり増えている。」

「それで、あの咳きですか。」

置いてけぼりを食らつてるスマートファルコンはオロオロしてい

る。

「ファルコ、何かしちやつた？」

ちょっと泣きそうになつてゐる。

「いや、何もしていな。ただ、タイムが頭おかしかつただけだ。」

「酷くない!」

「え、ええ。このタイムは流石に頭がおかしいかと。」

よく考えてみろ、歴代最速は1分56秒1だ。

その記録は、芝での記録かつ、熟練したウマ娘によるタイムだ。
それをデビュー前のウマ娘が、ダートで、2時間追い回された後に
出した記録だ。

これを頭おかしいと言わずに何という？

「むしろ、頭おかしいを通り越して狂娘だな。」

「あ、ひつどい！ ファルコそんなにおかしくないもん！」

俺はスマートファルコンの頭を撫でる。

そこから徐々に押さえつける様に力を入れていく。

「デビュー！ 前の！ ウマ娘がつ!! 1000mを58秒切つて!!
しかもダートで!! 2分切つて普通はゴールしねえよバカ!!!」

「き、教官?! ファルコの背が低くなっちゃう!?」

押さえつけた後に、俺は大きな溜息を吐く。

「スマートファルコン、後2日は風呂と寝る時以外は重りを着けて生
活しろ。そして、重さを2倍にする。」「え？」

「答えは、はい又はYESだ。」

「選択肢がない?!」

「3日後には走らせてやるから。あと、スマートファルコンの練習は
今日の分は終わりだ。これ以上走つたら自分で足を壊してしまう。」「
分かりました！」

「しっかりと柔軟して、疲れを取ること。あと、重りを着けて行動する
ということは、無意識に身体に力が入つてゐる状態だ。身体を作る為
にも、食事制限とかはするなよ?」「はい！」

「よし、そしたら軽くジョギングを2周して終わりだ。」

「今日はありがとうございました！」

そういうと、スマートファルコンは軽く走り出した。

「1日でこの成果はすごいな。」

「全くですよ。あとはウララちゃんですね？」

「そろそろ、次の段階に行きたいんだがなあ。」

さて、ハルウララはどうなつたかな？

この時間で、自分自身と向き合えてたら次のステップに移れる。

第14話

ハルウララの元に来ての感想

「は？ 何じやこりや？」

もうね、雰囲気が全然違うの。

なんて言えばいいの？

仙人？

到達者？

言葉で言い現せない。

はえーよ。

自分と向き合つて能力開花するの。

「ハルウララ？」

雰囲気が少しずつ収まつていく。

「ん~？」

ハルウララは目を開けてこちらを向く。
寝ていた訳ではないのは分かる。

「芝で短距離走つてみるか？」

ちよつと確認したい。

どこまで開花してるので。

そして、自身に眠る本能を見つけ出したのかを。

「走りたい！」

目を輝かせて、詰め寄つてくる。

「近い。なら、ゲートに行け。芝で、1200だ。」

「分かつた！」

ハルウララは、短距離レーンの方に掛けて行き準備をしだした。

「マジかよ。」

掛けで行く姿を見て、2時間前とは大違いという事も分かつた。
まず走り方だ。

よりスマートにストライドは大きく、腕の振りが前で大きく振る様
な形だ。

簡単にいうと、陸上選手の様な走りになつてる。

しかし、上半身は適度に前に傾いている。

「ははっ！ マジのバケモンかよ。」

この短期間でスマートファルコンに引き続き、ハルウララまでもが自身の限界を超えて成長している。

成長してくるのは指導者として嬉しいがこの後のことだ。
まだ、デビューもしていないからレースに慣れていない。

レースは簡単に対人戦だ。

プロックされることもあれば、見えない様に妨害されることもある。

それをどう切り抜けるかが全く掴めていない状態だ。

その為にも、戦術を学ばなくてはいけない。

学んだ所で生かす場所がなければ意味がない。

つまりは、

「経験不足になるんだよなあ。」

ここだけはどうしようも覆すことができない。

人を撃つた事のないトーシロに、ライフルと弾渡して、いきなりリードして銃弾込めて、人を撃てと言つてる様なものだ。

物事には必ず慣れも必要ということだ。

5～9程度で走るなら関係は無いが、それ以上となると無理だ。
バ群に飲まれて抜けなくなる。

「ハルウララ、準備できたか？」

「いつでも行けるよ～！」

「よし、では始めよう。用意、スタート!!」

ゲートが開く。

ハルウララは少し遅れて走り出した。

しかし、それは脚質が差しが1番得意だからだろう。

序盤は少しうつくりとしたペースだが、1ハロン毎に0・3～0・5秒ずつ上がつていてる。

「さて、1000mの通過タイムはつと。…………うん、悪くない。それどころか、G1レース並みだな。」

残り200になつて、ハルウララは更に前傾姿勢になつた。

一気に駆け抜ける気だな？

そして、ゴールを駆け抜けた。

ストップウォッチを止めると記録は、

「1分5秒3……おい、テメエもかよ。」

俺はハルウララを見てみる。

（身体に異常はないな。怪我の予兆もなし。）

「こいつも頭のネジ飛んでんじゃねえか？」

「え？ タイム良くなかったの？」

ハルウララは落ち込みかける。

「ちげえよ。お前も、スマートファルコンも何でデビュー前なのに、早すぎる異常なタイムを叩き出すのかねえ？」

俺は頭を抱える。

スマートファルコンはまだ100歩いや、5万歩譲つて分かる。

しかしハルウララ、ティーはダメだ。

基本ダートの適正なのに、芝走って、歴代のレコードを打ち破るのかが分からねえよ。

「俺もしかして、とんでもないことやつちまつたか？」

これからのことを考えると、ぴえんとしか言いようがない。

ぴえん

第15話

あく、どうしよ。

強く育てすぎた。

これぐらいじや育たないと思つて、別の練習メニューも考えておい
たんだが、別メニューはいらなさそそうだな。

「疲労は少ないが、少し身体に負担が掛かつてゐる状態か。」

この才能開花のメニューは、出来上がりついでいない身体に無理矢理技術を詰め込む様なものだから、その途中で中々怪我が絶えなくなる。
簡単に言えば、パソコンでデータのダウンロード中に容量が一杯になつて処理落ちすることがあるでしょ？

それとおんなんじなんだよ。

そうならない為に、外付けハードやUSBメモリを使って容量の削減をしたりするよね？

「ふむ、どう仕上げようか？」

「何考へてるの？」

後ろからおハナさんに話し掛けられた。

「いや、コイツら2人とも才能が開花しちやつてさ、今日は無理だけ
ど、明日ならいつでも勝負出来そうなんだよ。」

「この短期間で何言つてるの？」

俺はメモ帳に書いたタイムを見せた。

「一番上に書いてあるのが、ダートの2000mのタイムで次が、芝の
1200mでのタイム。ちなみに、ダートはスマートファルコン、芝
はハルウララが出したタイムだ。」

おハナさんは目が点になつてゐる。

「え？ 嘘でしょ？」

「本当なんだなあ。ちなみに証言はたゞな秘書がしてくれるよ。」

「え？ どつちもレコードになるわよね？」

驚きすぎて頭が追いついていない様だ。

「レコードどころか歴代の最速だよ。」

日付変更しようかな。

「おハナさんや、やっぱ明日の夕方にしましょう。」

俺は日付の変更を持ちかける。

だつて、こんなに調子がいいならすぐに当てるやらないと、いつ調子を崩すかが分からなくなる。

「私はいいけど、本当に大丈夫なの？」

「2人とも調子はいいし、身体にも異常は無かつたからいけるさ。」

「……分かったわ。明日にしてもらう様に理事長に伝えておくわ。」

「よろしく。」

「無理はさせないようにな。」

「あいよ。」

おハナさんはそれだけ言うと去つていった。
さて、

「2人とも集合！」

スマートファルコンとハルウララはすぐに集まってきた。

「担当するのは今日1日だけになつた。そして、明日の夕方にリギルの誰かと競つてもらうからな。」

「ええ～～～！」

「五月蠅い、喚くな。」

「はい!!」

2人とも直立の姿勢になつた。

「あたおかのお前らなら勝てる。今日やつた事を明日やればまず負けない。距離と芝かダートかは俺が決める。有無は向こうにも言わせない。」

「あの、私たちは誰と競うの？」

「俺の予想だと、スマートファルコンは似非ルチャ・ドーラだな。ハルウララは、女男か？」

「え?!」

2人が驚くが知らん。

「今日の走りをすれば負けないからな。今日の練習はここまでだ。明日に備えてしつかりと疲れを取る事だな。そして、明日は期待しているぞデビュー前のあたおかレコーザーコンビ。」

俺は練習を切り上げた。

その数時間後だが、寮内にて『私、頭おかしくないもん!!』という絶叫が響き渡り、寮長に怒られたとか噂で聞いた。

第16話

次の日、俺はグラウンドの端でカセットコンロに火を入れておでんを作っていた。

気になつた生徒に何回か話し掛けられたが、その時の顔が怖すぎたのか怯えた様にそそくさと去つていかれた。

ところで、何でおでんを作っているかつて？

それは勿論負けた時の罰ゲームに決まつてゐるでしょう？ 热々おでんを口に放り込む、コレはシンプルかつ凶悪で、なおかつ笑いも取れるという優れモノだ。

しかも、春に差し掛かり若干昼時が暑くなつてきたこの頃からすれば、なんともないかもしねりないが、

「沸騰させるに決まつてるじゃん。」

グツグツと鍋蓋が暴れ出す。

内心笑いを堪えるのに必死だ。

調理していると2人が来た。

「おはよー、教官！」

「今日もいい天氣だね教官！」

「お、2人ともおはー。」

鍋から目を離さずに挨拶をする。

「教官何してゐるの？」

気になつたのかハルウララが聞いてくる。

「ん？ お前らが負けた時の罰ゲーム作り。」

「え?!」

ギョッとして、鍋を見つめる2人

「いや、中身は美味しい美味しい美味しいおでんだよ。ただし、めつちやくぢや熱いけどね。」

つーか、匂いでわかるだろうに。

変なものは一切入れてない。

コイツらの為にも、野菜がメインで入つてゐるしな。

「中身は、人参、大根、つみれ、餅巾着、煮卵、白滝、ちくわだよ。」

「それって……。」

お、予想ついたかな？

「うん、口の中に入れた瞬間に汁による火傷の可能性大の具材ばかりだよ。」

「…………。」

2人はムンクの叫びみたいな顔になつてゐる。

「いや、何で負ける前提なの？ 勝てばいいじゃん。」

「そう易々と言わないでよお！」

「プレッシャー大きいんだよ！」

「シャラップ、お前らが気持ちで負けてどうする？ お前らは、あたおかコンビなんだからさ。」

「私、頭おかしくないもん!!!」

「おい氣味で叫んだ。」

「おおう、少しひっくりした。」

「スマン。じゃあ、頭のネジが飛んでる？」

「結局は頭おかしいって言いたいの!?」

息ぴつたりじyan。

「うん、大丈夫そうだね。」

「これだけいじり倒せば、緊張も取れるしね。」

それよりも、この2人はこなくそ精神が強い。

絶対に見返してやるつて気持ちが強い。

特にスマートファルコンは俺よりも強い。

ハルウララは変わったからね。

「まあ、走る前にこれを飲みな。」

俺は錠剤を1つずつ渡す。

「これって？」

「これは、安定剤だよ。緊張に弱い人とか気絶したりするでしょ？」

そう言つた人の為に作られたやつ。違法でもないから大丈夫だよ。でも、効果はちよびつと強いから、乱用はお勧めできないよ。」

「教官、ありがとう！」

「あと、競争まであと2時間ある。2人ともゆっくりとしてなさい。」

そう言つて2人を見送つた。

余談だが、勝手におでんを食おうとしてた、スラツとした芦毛のウマ娘がいたので、熱々の大根を口の中にねじ込んでやつたら、口を押さえながら地面に転がつた。

それを俺は見てゲラゲラ笑つていると、その芦毛を回収しに来た芦毛に謝られた。

「ホンマすまんなあ。」

「いいつて、いいもん見れたし。」

「助かるわ。」

それだけ言うと、首根っこを掴んで回収していった。

第17話

あの、競争なんですが、結論から言います。

……圧勝しちゃいました。

女男に関しては、今まで一番遅くて勝てなかつたハルウララに負けたことによるショックで、幼児退行してゐる。

スマートファルコンに関しては、8バ身差という結果を出してしまつた。

「ううつ、フジお家帰るう！」

肝心のおハナさんは、某アニメのビリビリ神みたいに口を開けて固まつてゐる。

似非ルチャ・ドーラは、体育座りをし、某ボクシングアニメの主人公みたいに燃え尽きてゐる。

まあ、俺はその姿を見て指差しながらゲラゲラ笑つているんだけどね。

「いやあ、良いもん見せてもらつたわあ。フハハ！」

おハナさんのチームリギルの面子も驚きが隠せていない状態だ。

「一体何をしたのですか？」

昨日の不憫なウマ娘が話しかけてきた。

「大したことはしてない。ただ、自分を見つめ直すトレーニングと走り方の矯正を叩き込んだだけだよ。」

「えつと、叩き込むつて？」

褐色のウマ娘が聞いてくる。

「そりや、ね？」

当時の状況を知つてゐるウマ娘は震え上がる。

スマートファルコンに関しては当事者だから、バイブルーションの様に震える。

「え？ 怖いんだけど。本当に何したの？」

怖い様だが、興味が勝つたらしい。

「手と足に重りを着けて走らせる。」

「なんだ、それだけかい？」

俺は首を振る。

「疲れてくると姿勢が崩れてくるよね？」

「まあ、そうだね。」

「1回目は見逃すが、2回目姿勢を崩したら、本能レベルで怖くなる殺氣を振り撒いて追いかける。」

「え？ なにそれ？ 恐怖！」

褐色のウマ娘は自身を抱く様にして震える。

「しかも、疲れてるからどんどん追い付かれていく。」

「え？ 絶対に逃げられない恐怖から逃げてる様なものじやん！」

更に顔を青くする。

当時の状況を思い出したのかスマートファルコンは更に震え出す。

「生きてる心地がしなかつたよ。」

ついにスマートファルコンの目から光が消える。

「は、ははつ、はははははははは……。」

ついに壊れた。

「虐待みたいに思うかもしないけど、1番効率がいいんだ。」

全員耳を傾ける。

「人もそうだけど、頭のどこがブレーキを掛けてるんだよ。脳の稼働率つてどれくらいか分かる？」

全員に聞いてみる。

「確か10%じゃなかつたかしら？」

流石おハナさん。

「そう言わてるね。でも、コレは知ってる？ 脳の容量つて、記憶で換算すると300年分あるって。」

「「「「え？」」「」」

コレは知らないパターンか。

「おかしくない？ 約60～90歳までしか生きられないのに300年分だよ？ どつかでセーブして使つてないって事だよね？ だから使える様に本能レベルに刻んでやれば良い。」

「それに、どう繋がるのか教えてもらつても良いかいトレーナー君」
お、良い質問だね。

「ふとした拍子に力を発揮できる時があるよね？　その時の感情って分かる？」

「いや、分からないな。」

だよね。

「ううう、そんな経験があつてたまるかつてんだからさ。
恐怖だよ。その時、生きねばつて脳が働いて力が出るんだよ。簡単
に言うと、火事場のクソ力つて言うんだけどさ。」

「なるほど、ね。」

「色々あるよ。子孫を残したい、生き残りたいといった生まれながら
に生物が持つ本能だね。それを呼び起させん為にやつたんだよ。」

「確かに理にかなってる。」

「まあ、ちょっと可笑しくなっちゃうけど。」

「「「「それはダメだろう!!!」「」」」

「まあまあ、それに成功したのが2人だからね。殆どは気付かずに押
し込めたままなんだけど、あの2人は相性が良かつたみたいだね。」

俺は、死んだ目をしているスマートファルコンと、いつも以上にキ
ラツキラの笑顔を浮かべるハルウララを見る。

「まあ、コレで決着と。おハナさんはサボートを3日だけでいいよ。」

「1週間じやなかつたかしら？」

「日程弄つちゃったの俺だし、3日もあれば覚えれるからモーマンタ
イ！」

「そう、明日から早速取り掛かりましょ。」

「宣しく。あと、教えてもらうけど、暫くは担当持ちたくないから、
訪ねて来ないでね。」

一気に空気が凍る。

「「「「はああああああ!!!!」「」」」

夕焼けのグラウンドに絶叫が響いた。

第18話

「何故、受け持たないのですか？」

「もうちょっと全員を見てみたいと思うし、俺が声を掛けても応じないでしょ？」

新人だし、あと新人だし、そして新人だし？

「でも、1日で成果を出してるじゃないか？」

「ただけどねえ？」

「見たのなら信じれるかもしだれだけど、見てない奴からすれば信じられないよな？」

それもあるけどね。

「俺のモットーは、『来るもの拒まず、去るもの逃さず』だからねえ。」

「「「「なにそれ？ 恐つ！」」「」」

周りが少し引く。

「いや、冗談だよ。来るものは受け入れるけど、俺から動こうとは思わないんだよ。」

だつて、めんどいし。

「担当を持つまではどうするつもり？」

「ん、適当に業務して、適当に目に止まつた娘にアドバイスしての繰り返しかな？」

「「「「うわあ、1番タチが悪い。」「」」」

何故だ？

これくらい普通ではないのか？

「トレ公、それをやつちやうと、相手からは自分の担当を取られると思つちまうよ。」

「んだよソレ。そいつの指導力がないだけじやないのか？」

「貴方ほど、観察眼に優れた人がいる訳じやないのよ……。」

おハナさんが呆れてる。

「まあ、そりがうな。おハナさんだつてミスはある。俺にだつてあるさ。」

そう言うと、周りのウマ娘が目を見開く。

「おい、なんだその反応は？　俺がミスをしない人間だと思つての
か？」

「いや、純粹に驚いただけさ。」

「そうだなえ、1つ話そうか。あれば、俺が前職に就いていた時の話
だ。」

「俺は記憶から呼び起こす。

うん、やっぱり失敗談だな。

「俺の所でどうしても馴染めないヤツが居たんだ。どうしたら馴染め
るか考えて出した結果が、部内格闘大会だつたんだ。まあ、俺の所は
格闘技も習わないといけなかつたからね。その時、絞め技の練習して
たんだよ。」

ウマ娘達は、予想がついたんだろうか遠い目をしだした。

「んで、ソイツは運悪く綺麗に絞め技決まつちやつてさ、落ちちゃつた
わけ。」

「もしかして……。」

「起きてみるとあら不思議、落とされるの大好きなドMに成り果てて
ましたとさ。ちなみに、女性がだぞ？」

「「「「あ……。」」」

ウマ娘達は呆然とする。

「ちなみにソイツは、怪我しても恍惚とした表情を浮かべながら、嬉々
として突っ込んでいく様なヤツになつちゃいました。」

アレは流石に俺でも怖かつたな。

『捕まつたら拷問ですか！　ナニされるのでしようか!?　凌辱？　激
痛？　楽しみで仕方ありません!!　1番槍逝つきまーす!!!』って言い
ながら敵陣地のド真ん中に空挺降下したからな。

パラシユート無しで。

「「「「ええ〜」」」

「これが俺の失敗談だな。これもあるから、俺がスカウトに動くこと
はないよ。」

「そう『言う』ことね。」

おハナさんは納得した様に頷いた。

「そう言うことなら分かりました。」

「そしたらトレ公担当持てないじゃないか？」

「だったら、こう言う噂を流してくれ。」

俺は言う。

「どんなのだい？」

「学園には圧倒的強さを与えてくれるトレーナーがいるが、指導を受けると人格が変わるか、アブノーマルになると。」

自分で言うのもなんだが、実際にそうだし。

「トレ公がそれでいいのかい？」

「評判は気にしないし、来るのは限られるだろうからな。」

「分かった。なら、そうしとくよ。」

褐色のウマ娘は、腑に落ちない様子だったが了承してくれた。

「さて、負けた女男と似非ルチャ・ドーラには、この栄養満点、愛情たっぷりの超熱々おでんを食べていただこうか？」

「「「「、」の鬼畜!!」」」

リギルのウマ娘達の怒声が響いた。

ヤハハ！

第19話

俺は空になつた鍋を持ちながら理事長室に向かつていた。
理由は結果を知らせる為と、今後の予定を話す為だ。

「理事長入るぜ？」

「了承！ 入つてよし！」

ちつちやいながらも、椅子に座り威厳を保とうとしている子供理事長の声が響いた。

扉を開けて入る。

いつも通りの2人がいた。

俺は本題を切り出した。

「4日後つて言つたけど、もう競争しちゃつた☆

「はい？」

理事長と秘書は見事なアホ面をした。

「い、今何と仰いましたか？」

この際だ。

まとめて伝えるか。

「いや、4日後つて言つたけど、2人が仕上がりつちゃつたから、今日やつてみたら圧勝しちゃつた☆」

理事長はこめかみを抑えながら溜息を吐く。

「了解、誰と走つたのか教えてもらえるか？」

「確か、女男と似非ルチャ・ドーラだつたぞ。」

「は？」

信じられないというか、状況が飲み込めないといった返しだつた。

「すみませんが、その2人に勝つたと言うことですか？」

「おん。嘘だと思うならおハナさんに聞いてみたら？」

「では失礼して」

秘書たづなは、早速電話をかけ出した。

少し話した後、こちらを向いてきた。
頭を押さえて。

「話は本当のようですね。理事長、勝つた相手は『フジキセキ』さんと

『エルコンドル・パサー』さんです。」

「なつ!？」

信じられないと言つた表情だ。

「女男は幼児退行して、似非ルチャ・ドーラは真っ白に燃え尽きてたぜ？」

アレは傑作だつたな。

その後に追い討ちで、おでんを口の中にねじ込んでやつたがな。

去り際には、『ピンクとおでん怖い』しか言つてなかつたな。

「どうよ？ 理事長さん？ 育てるのには自信があるんだぜ？」 4日もいらなかつたな。」

「ふむ……確定！ 貴殿をトレーナーとして迎え入れよう！」 そして、トレーナーになるからには、この学園のトレーナー寮に入つてもらう！」

よし、第一関門突破だな。

「それはありがたい。が、もう一つある。」

「確認！ 何だ？」

「俺は担当を取る気はないぞ？」

それだけ言うと2人は固まつた。

少しして理事長がプルプルと震え出した。

「憤怒！ 何故そうなる！」

「ちゃんとした理由はあるよ。」

俺は理事長を一旦落ち着かせる。

「俺が育成するのはいい。たが、それをしてると他のトレーナーの仕事が無くなる。で、その分が俺に押し寄せてくる。それだけは勘弁してほしいな。」

「そうですね。教えを受ければ、必ず勝てるようになるということですかね。」

秘書たづなは理解してくれている。

「そうだ。だから担当は持たない。だが、俺の元に自ら訪ねてきた者は必ず担当する。その為にも、おハナさんを通じて噂を流してもらう。」

「どういったものでしようか？」

俺はニッと笑い答える。

「教えを受ければ必ず勝てるようになるが、性格が変わると言つたふうに流してもらう。」

「何故そのように？」

俺はリギルのメンバーに話したことと同じことを伝えた。

すると2人の顔が引き攣つっていた。

「こ、個性的な女性の方ですね……。」

「困惑、随分と個性的なのだな？」

2人はリギルのメンバーと同じ反応をしていた。

「それもあるから、俺からはスカウトしないし動かない。」

理事長は、顎に手を当て考えている。

「了承!! そう言うことなら理解した！ 本当にその噂でいいのか？」

「勿論！ まあ、来ると考えるのは相当切羽詰まつてるか、本気で伸び悩んでる奴だけだろうからな。」

「では、こちらで手続きをしておきます。」

秘書たづなはそこに、『では』と付け加えた。

「歓迎!! トレセン学園へ!!」

「ようこそ、トレセン学園へ!!」

2人から歓迎された。

まあ、言葉は揃つてないが、タイミングが揃つていたのが気に食わなかつたので、マズイと言われているジンギスカンキヤラメルを、2人の口の中に捩じ込んだ。

2人は青い顔をして理事長室を飛び出していった。

まあ、その後めちゃくちや怒られた上に、1週間の謹慎になつた。

それもそつか。

閑話休題（i f）

謹慎の3日目あたりだろうか？

部屋にいるだけだから、何となしにテレビをつけてみたんだよ。
そしたらバラエティ番組で特集をしてたんだよ。

『現代に名を残す偉人達』ってね。

なんとなくコーヒー飲みながらこれを見てたんだけど、あるコーンナーでとんでもないのを発見してしまったんだよ。

『では、ゲストの方に聞いてみたいと思います！』

そう司会の人が言つて映し出したのは……

「ンン～～～～～？」

どつかで見たことある顔だな？

『はい、ゲストとして参りました。『星崎瀧』です。』

俺は名前を聞いた瞬間にコーヒーを吹き出した。

「はあ!?」

そんな俺の心は知らんとばかりに番組は進んでいく。

『星崎さんが思う偉人は誰ですか？』

司会が尋ねる。

『私が元特殊部隊にいたのはご存知ですよね？』

『はい、存じていますが……』

『私は当時隊長をしていた『榊龍一』隊長と言います。』

『何故でしようか？』

『何故と聞かれると、彼はどの完璧な軍人はこれまで見たことがありません。作戦に戦闘、個々の能力の見極め、そして癖の強い連中の統率が取れたのですから。』

『そんなにすごい方なのですね？』

星崎は首を横に振る。

『凄いなんて言葉では言い表せないです。私達の部隊の教訓は聞いたことがありますか？』

『はい、確か……『一個中隊』でしたよね？』

『そうです。これは、個人の戦闘能力が1つの中隊に匹敵すると言う

意味で付けられています。そのせいか、所属していた人数は10人もいませんでした。でも、戦地ではその少人数で大隊規模の敵を撲殺していました。』

『普通なら負けそうな戦力差ですね。』

『そうですね。個々の能力が異常すぎたからですね。例を上げるとすれば跳弾で一気に3人も撃ち抜く狙撃手とか、ね?』

司会の顔が若干引き攣っている。

『お、恐ろしい集団ですね。』

『その中でも隊長は群を抜いてました。』

『例え?』

『戦闘機に片手で捕まり、亜音速の中で敵を撃破し、次の戦闘機に飛び乗る。その戦闘機をそのまま飛んでる状態で鹵獲します。鹵獲した戦闘機で敵陣地のド真ん中に突撃、単身で大隊規模の敵を殲滅しました。』

『生きているんですか?』

『勿論です。しかも、邪魔だからと言う理由で武器は現地調達ですよ? 最初の方は徒手で倒していくんですから。』

このアホ!

なに勝手にバラバラ喋ってるんだ!?

『ちなみに私は、パラシユートなしで空挺降下ができますよ?』

『十分おかしな集団ですよ!!』

『ですが、味方の裏切りによつて私達はバラバラになつてしまいまし
た。隊長だけ見つかってないのです。』

『そうだつたのですか……。』

『まあ、裏切り者はすぐに見つけて、口ケツトに括り付けて、宇宙に裸
で飛ばしましたけど。』

『あんたらの部隊の人間の方が恐ろしいわ!!!』

司会が叫ぶ。

『まあ、私は戦場から退き、このように社会に適合してるのでですから。
他の人も溶け込んでますよ?』

『そうだつたのですね。他の人は一体どんな職業に?』

『ん、大半が警備会社かな。一部は自分たちの趣味の物作りとか、畑とかしてるよ。』

『なんというか、意外ですね？』

『さつきの話を聞いたらそう思つちゃうよね？』

『星崎さんはどう言つた職業に？』

『S M』

『はい？』

俺は画面を二度見した。

『だから、S M 嬢だよ？ ちなみにM担当よ。』

『そんな情報聞きたくねえよ!!』

『フヒツ！ おつと、失礼しました。少々その罵倒が心地よくて。』

『もうダメだ。なんでこの人ゲストに呼んだんだ？』

『いやあ、テレビだからこそ言いたいことがありますよ？』

『口クでもなかつたら張り倒しますよ？』

星崎は体をクネクネさせる。

『それはそれでこ褒美なのですが、置いときましょ。では、気を取り直して。……隊長、見てるんでしよう？ 近いうち逢いに行きますからね？ 20年前に居なくなつて私達がどれだけ探ししたことか。』

司会も静かに聞いている。

『貴方が居ないからこ褒美くれる人がいないじゃないですか!!』

『結局それかい!!』

『このアホ引つ張り出せええええ!!!!』

黒い服の男達に引つ張られていく星崎

『あ、ちょっと！ まだ、言いたいことが！ せめて、乱暴に適当に運んでくれると嬉しい!!』

『もうお前黙つてろ!!』

司会は息を切らせて叫ぶ。

『はあ、大変失礼しました。一旦コマーシャルです。』

俺はテレビの電源を切つた。

そして頭を抱える。

「はあ、あのバカが謹慎終わつたらどうするんだよ。」

それよりも……

「近未来の転生だつたのかあ。」

まあ、驚きはしなかつた。

「ま、いつでも俺は俺だ。この時代を楽しむだけだな。」

俺は口角を少し上げて笑つた。

そのあと、スマートファルコンとハルウララから電話が来た。

簡潔に言うと、『あたおかは教官じゃないか』とのことだ。

コイツらテレビ見てたのかよ。

今度会つたら、全力で追いかけてやろう。

20話

謹慎5日目の話だ。

部屋でゴロゴロとしていたところインターホンが鳴った。
「はいはーい、鍵なら空いてますぜ。」

「失礼する。」

入ってきたのは、全く接点のない奴だつた。
「あん？ 女帝様が何の用じやい？」

「貴様の監視だ。」

「そりやご苦労なこつて。」

俺は女帝様から目線を外す。

そして、再び目を閉じて寝ようとする。

「謹慎中だからとだらけおつて、身体が鈍るぞ。」

「俺は俺、女帝様は女帝様でいいじゃんかよ。こんなんしてると、身体は鍛えてるんでな。」

「は？」

俺は握っていたグリップを投げ渡す。

女帝様はそれを受け取る。

「なんだ、こんなのか？」

「ブフツ、じゃあ握つてみろよ。」

「ふん、貴様と私とじや力の差があり過ぎるだろう。」

「あらあ？ 女帝様はそれすら握れない貧弱なのでしてえ？ それならしそうがないねえ～？」

「貴様ッ！ そこまで言うならやつてやろう。」

女帝様はグリップを握つて、力を入れるが動く気配がない。

「何だと!?」

「そりや無理だろ？ だつて、それ握力300オーバーの人人が握るようだし。」

「なつ！」

「嘘言つてもしょーもないだろ？ ほら、貸してみろ。」

俺は床に置き、固定してその上に乗る。

グリップはビクともしない。

今度は、握つてから押し込んでみる。

すると、勢いが強すぎたのか、ガチンとグリップ同士が当たる音が響いた。

「ほらな？」

「何なんだ貴様は…………。」

「ポン帝は知つてるが、元軍人の現トレーナーさ。これでも戦争経験者だぜ？」

「もう驚かんぞ。……ん？ ポン帝？」

「そそつ、ポンコツゲキ寒ダジャレ皇帝、略してポン帝」

「貴様ぐらいだぞ会長をそんな風に言うのは。」

女帝様は頭を抱える。

「実際に本人にも言つたし理事長室で。ダジャレのダメ出しはメチャクチャグサつてたみたいだけど。」

「貴様が言つたからか、会長は最近生徒会室でダジャレの本を読み漁るようになつたぞ。」

「はつ、本格的にセンスがないのに磨いても一緒だ。」

「それ、本人の前で言うなよ？ 絶対だからな？」

「なにそれ、ドリフ？」

女帝様は目を見開いて怒鳴ってきた。

「それを言うと、会長のやる気が下がつて、生徒会の仕事効率が劇的に下がるからだ!!」

「そう、カツカすんなよ。乳酸菌とつてるう？」

女帝様は顔を赤くして、プルプル震え出した。

あ、ヤベエ

「貴様ッ！」

ついにキレた女帝様が飛び掛かつてきたが、難なく横に避け無力化する。

「暴れない暴れない。」

「貴様が原因だろう!!」

「まあまあ、監視に来たなら飯作つて？」

「何故貴様なんぞに!!」

「それとも、このまま拘束されたい?」

「チツ、貴様の条件を飲むから離せ。」

「ほいほい。」

俺は拘束を解いてやる。

「癪だが、貴様に敵はないのはこの短期間で分かつた。」

「そうであろう! そうであろう!」

「しかし、この部屋から出ようとすれば、貴様に襲われたと言おう。」

「はつ、言えばいいさ。お前みたいな乳臭いガキンチョはこっちから願い下げだ。俺が好きなのは、お前みたいに喧しくなく年上で、俺と肩を並べて戦える奴だ。」

「何だそれは? 貴様に並ぶ奴など居るはずがないだろう?」

「……いた。軍人時代に。まあ、それもいい思い出だ。」

「そうか。」

「それでメシ作つて?」

「……はあ、分かつた。文句は言うなよ?」

「やほーい!」

「全く、大きな子供か?」

ブツブツ文句を言いながらも台所に向かつていった。

十数分後に女帝様が作ってくれたメシはたいそう美味かつたとさ。

その後、日が暮れるまで女帝様を散々揶揄い続けた結果、帰る頃に女帝様は若干涙目になつていたとさ。

21話

謹慎が終わつて理事長室に行き、今後はこんな事がない様にとありがたいご指導を受けて、グラウンドに来てみた。

「おー、やつてるやつてる。」

1週間前見てやつたスマートファルコンとハルウララが一生懸命に練習をしてた。

「ほお？」

よく見るとスマートファルコンは重りを付けて練習をしていた。

「ふむ、いい心掛けだが無理し過ぎて疲労が抜けてないな。」

少し考えていると、スマートファルコンがこちらに気付き、手を振りながらこちらに駆け寄ってきた。

「おはよう教官！」

「おう、少し無理しすぎだな。」

「あはは。」

「疲労が抜けてないから練習強度が下がつている。2日休みを取れば元に戻るぞ。」

「やつぱり教官には敵わないね。」

力無く笑う。

「教官に教えてもらつて、模擬レースの申し込みとかされて受けたんだけど、あの日以来中々勝てなくて……。」

「そりやそりや。あの日が俺が仕上げた最高の状態だつたからな。」

スマートファルコンの目が点になる。

「あくまで調整だぞ。育成じやないんだ。そりやあの日を過ぎたら落ちていくだけだしな。」

「なにそれ!!」

育成と勘違ひしていたスマートファルコンに俺はある動きをする。

片足を上げて肘から上を胸あたりに持つていき、手首を曲げて左右に振る。

「教官、馬鹿にしてるのだけは分かるよ?」

「ダダダダ駄目ファルコン笑」

「教官!」

俺は笑いながらその動きを続ける。

「頭がおかしいのはアイデンティティさ笑」

「むー!!」

スマートファルコンはむかれた。

それを見て満足した俺は動きを止める。

「んで、用事は何だ?」

俺はふざけるのを止めて本題を聞く。

「私を勝てる様にして下さい。」

スマートファルコンは頭を下げてこちらを見る。

「ふむ、お前は他の奴らの所に行つたのか?」

スマートファルコンは頭を上げてこちらを見る。

「何人かは行つたけど、どうしても練習内容が合わなかつたの。」

俺は冷や汗が止まらなくなつた。

ヤバいよヤバいよ。

え?

たつた1日でここまで扉を開きかける?

「アレよりキツくなるぞ?」

「え? アレよりも?」

若干顔が引き攣っているが、嬉しそうな色も混ざっている。
失敗した。

完全に扉開いてるじゃん。

「はあ、分かつた。シニア期までにはポン帝や怪物に負けないようにな
鍛えてやるよ。」

「ありがとう教官!」

「教官じゃない。もう、トレーナーだろう?」

「!? はい! トレーナー!」

スマートファルコンは嬉しそうな顔を浮かべると練習に戻つて
いった。

俺は携帯を取り出し、おハナさんに電話をかける。

3コールもしないうちにおハナさんは出た。

『貴方から電話なんてどうしたの？』

「また、出来てしましました。」

『は？ 何の話なのよ？』

「ドMが出来てしましました。」

電話越しにガシャーンと音が聞こえた。

『どうしましょう。』

『私はなにも言えないわ。因みにどの娘？』

『スマートファルコンだ。』

『…………どんまい。』

『どこで失敗したんだ！ 調整は完璧だつた筈だ！』

『私に言われても知らないわよ。あと、謹慎前の約束ほつたらかした
事に関しては許さないからね？』

それを最後に電話が切れた。

『憂鬱だ。ダダダダ駄目トレは俺でしたつと。』

まあ、何とかなると思いつながら仕事に向かっていった。

閑話休題

俺がスマートファルコンを受け持つて、しばらくした頃理事長が不在した。

不在の間業務を受け持つことになつた、理事長代理の『樺本理子』が今日着任した。

美人で狐目にクールな雰囲気の代理だ。

というのは、周りの感想だ。

俺からしたら、あからさまに苦手な分野を隠そと必死になつているようにしかみえない。

それが何なのか思い出せないのが腹立たしい。

今は、他のチームのトレーニングを指導中みたいだ。

俺は数メートル離れた所で、スマートファルコンを待つてゐる。

「ん？　んん？　ん～？」

首元まで出かかつてゐるのに悔しいな。

「理事長代理を見てどうしたのトレーナーさん？」

考えているとスマートファルコンが来た。

「いや、ちょっとな。」

なんだつたつけ？

んく、ウチの部隊に似た様な奴が居たから思い出せそうなんだけど

……。

「んく、何だろうなあ？」

何だつけなあ？

「トレーナーさん、トレーニングに行こう？」

「そうだな。今日はダンストレーニングだな。」

俺はそれを見逃さなかつた。

ダンスという単語を聞いた瞬間、理事長代理の肩が少し跳ね、表情が引き攣つたのを。

俺はそれを見て思い出した。

「ヤハッ！」

「トレーナーさん、悪い顔してゐる。」

いやあ、最近はポン帝も、女帝も、男女も、盗み食いを弄つても面白い反応が無かつたからなあ。

いいおも……いや、おもちや見つけた。

「ンフフ。いやあ、退屈しなさそうだなあてね？」

「トレーナーさん？」

「いや、トレーニングに行こうか。ダンスにね、ダンスに！」
ダンスの単語のたびに跳ね上がる理事長代理

いやあ、見てて飽きないね。

スマートファルコンのおかげで思い出せたよ。

あの反応は、運動が全くと言つていいくほど出来ないタイプだ。
6歩歩いて2本足を挫きますというタイプだ。

それぐらいに運動神経が皆無の人種だ。

「スマートファルコン、一緒にブレイクダンスでもする？」

「トレーナーさんどうしたの？ すぐく上機嫌だね！」

「いや、こんな感じにさ。」

俺はかなり難易度の高いブレイクダンスを即興で踊つてみせる。
それも、理事長代理の視界に入る所で。

「わあ！ トレーナーさん凄い！ ファルコにもできるかな？」

「ちょっと練習すれば出来るぞ。ウマ娘は運動神経がいいからな。
に運動神経が無いと全く出来ないからな！」

おー、理事長代理さんよ、こちらを見てどうしたんだ？

「ん~？ 理事長代理さん？ どうかされましたか？」

俺は笑いを堪えつつ話しかける。

「い、いえ、何もありません。」

「声が震えている様ですが、如何なさいましたか？」
「気の所為です。」

おーおー、気丈なこつて。

「さいですか。んじや、練習に戻りますので、ブレイクダンスの！」

理事長代理の表情が更に引き攣る。

ヤハハツ！

いやあ、これでもかつてくらい面白いな。

他に言つて回るのは、俺の弄る時間が減るから言わんでおくけど。
しばらくはこれで揶揄うよ。

俺はグラウンドを後にした。

ちなみに、ダンストレーニングはスマートファルコンと一緒にアクロバティックブレイクダンスをしました。

閑話休題（その2）

ブレイクダンスをスマートファルコンに教えた後、たづな秘書にこの話を持ちかけてみた。

「え？ うまびよい伝説の振り付けを覚えたいから、私と桐生院さんと理事長代理でやつて欲しいと？」

「ええ。俺がスマートファルコンを受け持つたのは知っていますよね？」

「それは勿論です。」

「俺が担当したからには、1着以外あり得ません。そしたらURAのダート部門を優勝するのは間違いないと確信しています。」

俺は自信を持つて答える。

「は、はあ。」

「だからこそですよ。スマートファルコンにあの大舞台でセンターとして踊つて貰いたいから、振り付けを教えたいんですよ。でも、俺はうまびよい伝説の曲自体を知らないんですよ。」

「そうですか。まあ、元軍人なので娯楽には疎いと思いますが……何故、私たちなのですか？」

純粹な疑問で聞いてくる。

「正直に言います。覚えてもないし、知らない曲を男の俺が踊り出したらどう思いますか？」

「……ああ、そういうことでしたか！ それなら分かりました！ 2

人には私から伝えておきます。」

「ありがとうございます！ ちなみに見るのは俺だけなので、周りの目は気にしないでいいですよ。」

「そうですか。確かに、私も少し恥ずかしいです。」

俺は内心ガツツポーズをした。

さて、理事長代理さん？

貴方の運動神経の無さを見せてくれ！

そこから1度解散して、2時間後に再度集合することになった。

俺は弄れるのが楽しみで仕方ない。

さて、どうやつて時間を潰そうかな？

適当に敷地内をブラブラしていると、反対側から理事長代理が某魔術師殺しのように絶望した顔をして歩いてきた。

それで俺のツボに1ストライク

そして歩いている時に、左足を挫いた。

2ストライカーク

そして、トドメと言わんばかりに思いつきリズツコケた。

ストライーケーク！

バッターアウト!!

俺は我慢できずに、ゲラゲラ笑い出した。

「ヤハハハハハッ！ は、初めて見た！ 目の前で何もないのに転ぶ人
!!!」

いや、初めてじゃないな。

軍属の時に部下のを見てたな。

まるでピタゴラ〇イツチみたいだつたなあ。

まず転ぶとき、引っ掛けていた物干しを巻き込んで、物干しに掛かっていた物全てがそいつに降り注いだ。

トドメと言わんばかりに物干しに引っ掛けたタライがそいつの頭に直撃した。

アレはもう傑作だつた。

「ブフツ、理事長代理大丈夫ですか？」

「あ、ありがとう。」

そのままなのは気が引けるので、理事長代理を起き上げる。

「どうしたのですか？」

「実は、2時間後にうまびよい伝説を踊ることになりました。」「それで？」

「私、全くと言つていいくほど運動が出来なくて、どうしようかと悩んでいたのです。」

「そうですか。ちなみに、踊つてもらうように言つたのは俺だ！！」「え？」

理事長代理は顔を上げると俺を見て驚いた。

「あ、貴方はさつきの……！」

「ヤハハハハッ！ 楽しみにしてるぜえ！」 理事長代理サマ！」

俺は、笑うだけ笑った後に逃げ出した。

「あ、ちょっと、待ちなさい！」

後ろから声が聞こえた後に、『へぶつ！』と声が聞こえた。
おそらく転んだのだろう。

さて、2時間後が楽しみだなあ。

閑話休題（その3）

結論から言おう。

うまぴよい伝説の踊りは中止になつた。
いや、正確には途中で終わつた。

順を追つて説明すると、

『位置についてよ～い、どん!!』

理事長代理が、上空に靴を投げ出す+ビターンと顔からこける。

『う～、うまだつち!』

理事長代理悶絶中

『うまぴよい！　うまぴよい！』

理事長代理悶絶中

ようやく理事長代理復活するも、テンポが遅れる。
しばらくして、サビの部分で……

『君の愛馬が、ズキュン、ドキュン走りだし～』

理事長代理、走り出そうとするが足を捻り、悶絶

それでようやく気付いた2人

理事長代理を保健室へGO

俺、3人が去つて行つた所で大爆笑
それから現在に至ると。

いやあ、笑いを堪えるのに必死だつたなあ。

2人も気付くのが遅いしさ。

ワザとやつてんのかつて思うくらいだつたよ。

笑つた笑つた。

「サビ後半の振り付けが分からないんだよなあ。」

どうしようかと考えていると3人が戻ってきた。

「理事長代理サマ、お怪我の具合は宜しくて?」

「普通に話しなさい。」

理事長代理はすっかりむくれていた。

俺は、理事長代理に近づき、

「まあまあ、そうむくれないの。」

そう言いつつ、理事長代理の両頬に人差し指で突つついた。

フプツという可愛らしい空気の抜けた音が鳴り、理事長代理はむくれた顔から、どんどん赤くなつていく。

その様子を見ていた2人は『ヤベエ、やつちやつたよ』という顔をする。

「貴方ねえ!!」

今度は目をひん剥き、怒りを露わにした。

「そうカツカすんな。俺も予想してなかつた。」

「何がですか?」

「理事長代理が俺の予想以上に運動ができない人だつて事」

理事長代理は俯き、肩をブルブルとさせ出した。

ヤベツ、ガチで怒らせちゃつたか?

「そこまで言わなくともいいじやないのおおおおお!!!」

顔を上げた理事長代理は、某駄女神のように泣き出した。

「榊さん」

「榊トレーナー」

「やりすぎです。」

「すんませんした。」

「これは反省だな。」

「すんません、言い過ぎました。でも、日頃からの練習も必要ですよ

？」

理事長代理はまだグスグス言つてゐる。

「貴方はやつてゐるようで出来ていない。」

俺が身体を覗た所によると、運動が出来るように練習をしていたら
しいが、それは非効率かつ非合理的なやり方みたいだ。

「理事長代理、貴方には基礎筋力が圧倒的に不足している。そして、反
射神経が常人より圧倒的に遅い。」

理事長代理は泣き止んで、真剣に話を聞いてゐる。

「良く言えば可愛らしい、悪く言えば鈍感で鈍い。」

コラ、後ろ2人頷かない。

「それは置いといて、今度基礎メニューを渡しますので、まずは2週間
試してみてください。その後は、かんがえましょう。」

「ありがとう。」

なんやかんやで、俺が基礎メニューを作る事で落ち着いた。
さて、今更なんだけどさ、

「うまいよい伝説のサビ後半の振り付けが分からぬから、独断でオ
リジナルの踊りを入れてもいい？」

「「絶対ダメです!!」」

3人から怒られた。

何でこんな時だけ息が合うんだよ。

この後は、俺に言い負かされた3人が泣きながら、うまいよい伝説
を最後まで踊りましたとさ。

ちなみに理事長代理は、また開始早々に顔から行つてました。

スマートファルコンを担当にして1週間が経過した。順調にスマートファルコンは強くなつてきている。

ちなみに俺の1日のルーティンができた。

朝はスマートファルコンの朝練を見に行く前に必ず、芦毛のブラツクホールの口に食べ物を捻じ込んだあと、それを回収しにきた関西弁の芦毛を捕まえて、オギヤリストに引き渡すという事だ。

その後にスマートファルコンに合流する。

その光景を満足するまで笑いながら眺める。

「トレーナーさん！ おはようございます！」

「おう、調子はどうだ？」

「バツチリだよ！ トレーナーさんは？」

「俺バツチリだ。いつものアレしてきたから。」

俺は3人の方を指差す。

それを見てスマートファルコンは納得したように苦笑した。

「アハハ……いつものアレだね……。」

芦毛のブラツクホールが口を押さえて転げ回り、関西弁の芦毛が虚な目をしてでちゅねされ、それをオギヤリストがよしよししている光景だ。

「トレーナーさん今日は何したの？」

「今日は、わざびたつぷりシユークリームだ。そして、オギヤリストには、芦毛の関西弁が寂しがつてゐぞと連絡入れたら、2分で来やがつた。」

「うわあ……。」

「まあ、いいんじゃね？ オギヤリストは最近調子が良くなつてきているらしいしさ。」

「まあ、それは言えてるけど……。」

そう、オギヤリストは最近だと春の天皇賞でぶつちぎつての大差勝ちを果たした。

「マジで、あのラストスパートはバケモンだつたな。」

コーナー抜けて更に加速し出したからなあ。

「私もある風に早くなれるかな?」

スマートファルコンが聞いてくる。

「あん? そりやなれるだろ?」

俺はスマートファルコンとオギヤリストを交互に見る。

「どうして断言できるの?」

「……フツ」

俺は一部を見て鼻で笑う。

「凄くムカつく笑い方だけど、トレーナーさん教えてもらえるかな?」

「そりや決まつてんだろ? お前の方が身体中にある白筋がオギヤリストに比べて圧倒的に多いからな。中距離までならお前が勝つだろ。長距離はお前に向かないから勝てないがな。」

「へえ、本音は?」

スマートファルコンがジト目を向けてくる。

「お前の方が空気抵抗が少ないから速い。」

「もうっ! トレーナーさん!!」

「ふははははは!! 事実だろうに!」

スマートファルコンは腹を立てるが、俺に勝てないことを知つていいる為。プリプリと怒るしかない。

「まあ、前半に言つたことも事実だ。」

「うん、分かつてる。」

「今日は、スタートダッシュの練習だな。お前はゲート難ではないが、ゲートが開くと同時に飛び出すくらいの反応速度を身につけてもらう。」

スマートファルコンは頷く。

「確かにお前が目指すのはダートじゃ目立つことが少ない。でも、アイドルだろうが軍人だろうが最初は泥臭いんだよ。泥の中から這い上がつてこそその証明だろ? だつたら、証明して見せろ。最後に残つて立つている奴が勝者だ。」

「はい!」

スマートファルコンは元気よく返事をする。

「よし、それじゃ始めるぞ。スタートダッシュ1回失敗するたびに夕方の坂路ダッシュが10プラスされていくからな。」

「えええ～～～！　さつきまでの感動返してよ！」

「うるせえ、さつさと始めるぞ。それとも芝の坂路ダッシュするか？」

「すみません！　ファル子が悪かつたです！」

「よし、さつとやつて終わるぞ。授業に遅れるなんて許されないからな。」

「は～い！」

それからスマートファルコンは練習を始めた。

結果は坂路ダッシュ60プラスが確定した。

スマートファルコンは某魔術師のように絶望した顔になつてた。

「よし、今日は終わりだ。」

「はいいく。疲れたあく。」

スマートファルコンは、汚れることすら気に留めず地面に寝転がつた。

「我ながら厳しく設定したが、まさかやり遂げるとは驚きだな。」

内心かなり感心していた。

朝練の時の坂路ダッシュを60本追加したが、かろうじてコイツはやり遂げたのだ。

まあ、後半はかなりバテていたがな。

「取り敢えず、1週間は坂路ダッシュを繰り返す。坂路のメニューで身体を作ることにより、他のウマ娘よりスタミナとスピードが格段に上がるからな。」

「はあい。」

「しかし、その分の怪我をしやすい。特に、膝から下に痛みを感じたらすぐに報告するよう。しなかつた時は、な？」

「え？ 何？ 私何されるの？ 憂く怖いんだけど?!」

「金輪際運動ができなくなつても良いんなら、報告しなくともいいがな。」

スマートファルコンは首を大きく横に振り、

「します！ ちゃんとします！」

大声で言つてくれた。

「それなら良い。さて、そろそろ終わろうか。スマートファルコンも夕飯と門限もあるだろ？」

「そうでした！ お疲れ様でした！」

「はいよく、お疲れさん。」

スマートファルコンは早々に帰つていった。

さて、俺も帰る前に1本行きますか。

「すまない、少し良いだろうか？」

「ん？」

そこには芦毛のデカいウマ娘がいた。

「おや、デカバナナ先輩じゃないですか？ 何用で？」

「誰の頭がデカいって?!」

「わあお、コンプレックス引き当てちゃつたみたい。

「はい、カリカリしない。んで、聞きたいことつて？」

「あのメニューは理にかなっているのかと思つてな。」

「なるほどねえ？」

「じゃあ逆に聞くが、3年間クロカンを走つたやつと、平坦な競技場を走つた奴が一緒に走つたら、どつちが勝つと思う？」

「……平坦な方が？」

「ブツブツハズレだ。正解は逆だ。クロカンは簡単に言うと山道だ。アップダウンのある道を走る。んで、片方は何の起伏もない平坦を走る。山道を走ることにより体幹も鍛えられる。それに、坂を駆け上がるから、当然脚力も付く。そんな強化された奴が、何の障害もない平坦などところで走つたらどうなる？ そりやあ、圧倒的に勝つだろうな。」

「そう言うことが……。」

理解したように頷いている。

「そそつ、理解が早いようだから言うけど、コレで身体を作つてやつてると言うことだ。」

「そうか。ただの根性論だと私が勘違いしていたようだ。」

「わかれば良いのさ。話は終わり？」

「ああ、済まないがそれだけだ。」

「いや、別に構わんぞ？」

「引き止めて悪かつた。」

「はいはい、んじやあの、ビッグバナナ。」

俺はそう言うと同時に走り出した。

後ろから『私の頭は大きくないぞ!!!』と聞こえてくるが無視した。さて、ネタができた。

次は、どうやつてイジろうか少し楽しみになつた。

24話

昨日の練習の後からではあるが、俺の練習の見学に来るトレーナーとウマ娘が増えた。

何故に？

首を傾げていると、黄色い服を着た喫煙所で会ったトレーナーが話しかけてきた。

「よう、お疲れさん。」

「ああ、あの時の変態不審者ですね。」

「おい！ 変なこと言うなよ！」

「え？ だつて、年頃の娘の大腿部あたりを撫で回す趣味があるのでは？ 変態不審者先輩？」

「違う！！ それは、つい鍛えているのを見ると無意識にやってしまうんだよ！」

なんと？！

「無意識に触りたくなる程女性の大腿部が好きと……？」

「んなわけあるか！」

まあ、先輩弄りはここまでにしどきますか。

「それで、変態先輩は何をしに？」

「だから……まあ、いいか。いや、お前さんが元軍人なのが生徒にも広がつてな。軍隊みたいなトレーニングをしてるのかが気になつてゐたいでさ。」

「なるほどねえ。トレーナー自身も気になつて仕方ないと？」

「そんなどこだ。」

なるほど、なるほど。

軍隊なんて作る気ないぞ？

「心外だな。軍隊なんて作る気あるわけないのにさ。」

「お前はそう思つても、周りがそうは思つてないんだよ。なるほどねえ。」

「一回だけ、やってみるか。」

「そんなに気になるなら、一回だけ……いや、3日だけ軍隊式をやって

みましょーか?」

「マジかよ? バッシング受けるぞ?」

「一応トレーニング効果はとしては、スピード、スタミナ、根性がかなりつきますよ? ただ……」

「なんだ?」

「あまりのキツさに逃げ出すかもしれないんで。」

「サラッととんでもないことに言つたな?」

「だつて、事実だしねえ。」

「もちろん監督としてトレーナーも参加ですよ?」

「え? 僕たちもすんの?」

「当たり前だろうに……。」

トレーナーがキツさを分からないと教えられないでしょ?」

「そうと決まればつと。ファルコー!」

「はい!」

「明後日から、軍隊式トレーニングを3日だけ行う。」

「え?」

「かなりキツいから心しておくように。あと、これが終われば劇的なレベルアップも期待できる。」

「そ、そななんですか?」

「もちろん。」

「1つだけ質問が……。」

「なんだ?」

「あの、トレーニングのキツさはどのくらいなの?」

「俺は薄く笑いながら答えた。

「想像を絶するぞ?」

その瞬間にファルコは笑顔のまま固まつた。

「もちろん、他のトレーナーとウマ娘も参加させる。」

その言葉に少しだけ目に光が宿る。

「あとは、申請なんだが……通るか?」

まあ、聴いてみないことには変わりない。

理事長室に行こうかしたら声が響いた。

「不要！　話は聞かせてもらつた！　ウマ娘達が成長できるなら許可する！」

理事長が真後ろにいた。

「お、ラッキー。行く手間が省けました。」

「確認！　参加させる者はすぐに言えるか？」

「言えますよ。まずトレーナーは、その変態、おハナさん、グラサン、幸薄な若人だな。」

「了承！　沖野、東條、黒沼、南坂トレーナーの4人だな！　ウマ娘は？」

先輩……変態で分かつてしまふのか。

「そつちは…………いつしばくん、男女第二形態、太り氣味、ポン帝、女帝（笑）、オギヤリスト、009、逆噴射、万年3位、鼻血ブーかな。」「了承！　ダイワスカーレット、ウオツカ、スペシャルウイーク、シンボリルドルフ、エアグルーヴ、スーパークリーク、ミホノブルボン、ツインターボ、ナイスネイチヤ、マチカネタンホイザだな！」

だからさ、なんで分かるの？

「あとは、俺のところからファルコだ。」

「承認！　明後日からの3日間だな！　授業の方は公欠にしておこう！」

「助かります。トレーナーとウマ娘の方にも伝達お願いします。明日、ミーティングをするので。」

「了承！　期待しているぞ！」

その後は少しだけ練習をして解散した。

「さて、集まつた頃かな？」

俺は、大會議室に入つた。

入つた瞬間に、全員がこちらを向く。

「おおう、圧巻どすえー。」

「真面目にやらんか。」

「女帝様はお堅いなあ。まあ、真面目な話をするけどね。」

俺は全員が居るのを見回す。

うん、オツケー不満は抱いてなさそуда。

「何故これをやろうと思つたきつかけは、俺が軍隊を作るつもりでいると言う噂を払拭するためだ。これをやつてるところを見せて、普段のトレーニングとは全く違うぞと言うのを見せる。だが、ただの払拭で終わらせる気はない。このトレーニングの終了後には、劇的にスピード、スタミナ、根性が付くと言うのを約束しよう。」

さて、徐々にスイッチを入れていこうか。

「このトレーニングは徹底した俺の管理の元実施する。トレーナーごとの指導方針に反する事もあると思うが、そこについては目を瞑つていて欲しい。あと、質問がある時は手を挙げて質問してくれ。これについてではトレーナーも同様だ。俺はこれからやる気スイッチオンにするから。」

「はい。」

「おハナ先輩どうぞ。」

「徹底した管理と言つたけど、怪我とかの心配は？」

「それについては自己申告となる。このトレーニングはかなりキツい。強くなるためとはいえ、少しでも痛みが出た場合はすぐに申告するようだ。ただし、キツいからと言う理由で逃げる事は許さん。その時は地の果てまでも追いかけて……な？」

「分かつたわ。以上よ。」

「あと、人やウマ娘として扱わないような発言もする。これは、精神面で強くなつて欲しいからだ。暴言ほど、このトレーニングで精神面を

強くする手はないからな。」

「なんだと!?」

女帝様が怒りを露わにして立ち上がる。

「ちよつ、エアグルーヴ先輩やめた方が……。」

ファルコが止めにかかる。

「黙れ。手も上げていらない貴様に発言権はない。言つただろ？ これは今までのお前らの考えるトレーニングではない。軍隊式だと。俺の徹底した管理で行うと。それともなんだ、テメエは今から修行僧にでもなるのか？ 火の前で念仏でも読むのか？ 滝に打たれるのか？ 今からか？ 馬鹿じやねえのか？ そんなの長年やらないと成 果に繋がらねえよ。ちつたあその足りない頭で考える。2度はないと成 果に繋がらねえよ。ちつたあその足りない頭で考える。2度はない ぞ座れ。」

「チツ、分かつた。」

「明日からのトレーニングは朝も早かつたりするからな。別の場所で 寝泊まりしてもらう。それについては俺の方で用意する。朝が早い 時は周りのやつに迷惑が掛かるからな。質問は？」

スッと手が上がる。

変態先輩だ。

「どうぞ。」

「そのトレーニングはトレーナーも参加だよな？ と言うことは俺ら も練習をすると言う認識でいいか？」

「その通りだ。トレーナー自身がキツさを理解してないと、教える事 も教えることができないだろ？ 勿論俺も参加できるところはする が、全体を見なくてはならない。参加できない所も出てくるだろう。」

「トレーニングはウマ娘と同じ内容か？」

「いや、減らして人用にする。同じ量をすると逆にトレーナーが壊れ てしまうからな。」

「なるほどな。了解した。」

「他、質問は？」

「はい！」

今日はファルコが挙げた。

「どうぞ。」

「練習内容は教えて頂けるのかなあつて……。」「そうきたか。

「練習内容は一切明かさない。これも精神面を強くする1つだ。先の見える終わりのある練習と、先の見えない終わりのない練習だとどちらが頑張れる?」

「終わりのある練習です。」

「そう言うことだ。分かったか?」

「はい。」

「他に質問は?」

俺は全体を見渡すが、手の上がる気配がない。

質問は無いようだな。

「よし、そしたら明日からトレーニングを開始する。朝の時間帯については不明だ。俺が全員起こしに行くから、その時からトレーニング開始だ。以上よ解散!」

全員を解散させた。

さて、明日から楽しみだな。

ミーティング後

「トレーナーさん、雰囲気が凄く怖くなつてた。」

トレーナーさんが出て行つた後、全員が大きく息を吐いた。

「やる気スイッチ入れるつて言つてたけどよ、アレで完全にスイッチを入れた訳じやないんだろうよ。」

「雰囲気で場を支配する人初めて見たわ。」

東條トレーナーも驚いている。

「しかしよお、徹底した管理つて理事長代理よりヤバいんじゃないのか？」

「んなこたあねえよ。あの手の奴はしつかりと考えてる。ただ……。」

黒沼トレーナーはエアグルーヴ先輩をチラツと見る。

「沖野」

「分かつてゐつておやつさん。」

沖野トレーナーもエアグルーヴ先輩を見る。

「全く何なんだ！」

「気持ちは分からなくもないが、落ち着いたらどうだ？」

「会長！ 私は納得がいきません！」

「エアグルーヴ……あの人人が言う通りで普段のトレーニングとは違うんだ。納得できなくとも理解するしかない。」

「しかし……。」

「このトレーニングでは彼の指示に従おう。絶対強者、場を雰囲気で支配するほどの人だ。3日間は彼に従おう。」

「会長がそう言うのであれば……。」

「どんなトレーニングなんだろうな！」

「アンタは少し落ち着きなさいよ。」

「だつてよお、軍隊式つて聞いたことないぜ！」

「あたしもよ！ 少し怖いけど……。」

「んだよ、ビビつてんのか？ ジャア、明日からの練習は俺が勝つな

！」

「なによ！ そんなのやつてみないと分からぬでしょ！ というよ

り、勝つのはあたしよ!!」

2人は早速言い争つてる。

「マスターご指示を。」

「ん？ ああ、今日休みだ。明日から俺のトレーニング以上にヤバいと思うからな。」

「オーダーを受理、今日は休みます。」

黒沼トレーナーとミホノブルボンは大会議室から出て行つた。

「毎回3着のあたしが強くなれるのかな？」

「ターボはもつと早くなるよう頑張る！」

「そうですね。2人とも頑張りましょう。」

「私も頑張るぞ！ えい、えい、むん！」

「タンホイザも頑張りましようね。」

南坂トレーナーはチームの皆を元気付けてる。

「ファルコさん頑張りましょう！」

「はい、クリーク先輩も頑張りましょう！」

スープークリーク先輩が話しかけてくれた。

「トレーナーさん、ちょっと怖かつたですねえ。」

「はい、あのような雰囲気は初めてですよ。」

沖野トレーナーの言う通りで、アレで完全にスイッチを入れてないから。

「普段の姿からは想像できないくらいに怖いです。」

そう、ファルコのトレーナーは普段の姿が巫山戯ている。

ウマ娘達を弄り散らかし、トレーナーも弄り散らかす。

アレ？

殆ど弄られてるだけじゃない？

あとは、本当に怖くなるドッキリを仕掛けられる。

あと、タマモクロス先輩が捕まつて、でちゅねされる。

1番被害受けてるのタマモ先輩じゃない？

まあ、明日のトレーニングでどんな風になるのかは分かる。

ファルコも休みを言われてるから、今日は休もう。

あと、寝る所を手配するつて言つてたけど、何処なんだろ？

考えていると、連絡が来た。

グラウンドの端に小さなプレハブが2つ立ってるからそつちに泊まれと連絡が来た。

全員で行つてみると、左『女ガキども』、右『オスども』って立札がしてあつた。

立札に全員がキレたのは言うまでもなかつた。

26話 1日目午前

「午前3時」

俺は、プレハブの前に来ている。

他は、未だにぐっすりと寝ているが、練習をこれより始める。

俺は思いつきり笛を吹く。

「テメエら全員起きろ！」

夜中という事もあり声がよく通る。

プレハブの中からはバタバタと音が聞こえる。

「最初だからな。10分後着替えて集まれ。遅れたらペナルティだ。」

俺は、時計で時間を計りながら待つ。

5分経過した頃、真っ先に4人と男トレーナーが全員来た。

4人は、009といつちばん、男女第2とウチのドMだった。

「おう、最初にしては上々だ。」

「こんな朝早くからするのか？」

変態先輩が聞いてくる。

「そりや勿論だ。これも計画の内であるし、間に合わないのもいるはずだからな。間に合わなかつた分のメニューも考えてある。」

「マジかよ……。」

8分が経過するくらいにおハナさんとポン帝、女帝様、オギヤリス
トが来た。

「こんな時間に起きることになるとはね。」

「こんな薄暗い時間からか？ 全く常識がないな。」

9分が過ぎる頃に逆噴射と万年3位、鼻血ブーがやってきた。
そして、10分が経つた。

「おい、1人足りねえぞ？」

「マジかよ？」

変態先輩は周りを見渡すと、顔を少し青くする。

「スペは？」

「今すぐ読んで来い！」

いつちばんがすぐに呼びに行つた。

それから集合したのは15分後だつた。

「さて、集合に遅れた訳だが、どうして起こつたのか説明してもらおうか？ だが、遅れた原因がコイツ1人のせいにするのは無しだ。」

全員の顔は強張つている。

「こんな時間に起こした貴様が悪い。」

「ふはははは！ 僕が悪いと言うか！ 今までやつて來たがそう言わるのは初めてだ。なるほどねえ……社会舐めてんの？ 仕事の納期ギリギリに変更になつた時もそれ言うの？ いきなり変更した貴方が悪いですって？」

「それとは話が違う!!」

「は？ 一緒だらうが？ ワガママ言うな。昨日、俺は朝練の時間を言つたか？ 言つてねえよな？ 普通だつたら詳しく聞こうとするよな？ 何故しなかつた？ 気付きませんでした、頭が回りませんでした、貴方が時間を言わなかつたでした、以外で理由があるなら言えよ。」

「……。」

「言えねえよな？ だつたら黙つて従え馬鹿が。」

「チツ！」

「おーおー、隠さなくなつてきたな。」

「なんだ？ 気に食わないから突つか掛かつて来てるのか？ ガキかよ。ウマが合う合わない絶対にあるんだよ。それくらい理解しろ。」

「は、はい！」

いつちばくんが手を挙げた。

「お、昨日言われた事を忠実に守つてるな。」

「いいぞ。」

「私が近くに居たのに起こしませんでした。」

「ほう、何故？」

「いきなり起こされて、頭が回らず、私のことでいっぱいでした。」

「なんとまあ、素晴らしい回答をしてくれた。」

「お前、俺が1番欲しかつた回答を言つてくれたな。」

「あ、ありがとうございます！」

俺は全員を見渡す。

「昨日言つたよな？ 普段の練習とは違うと。一緒に生活してる以上はライバルであり仲間だろ？ 仲間をお前らは平然と見捨てるのか？ 普通は見捨てないよな？ 現状お前らは見捨ててんだよ。その結果がコレだ。急いだ時、我が身が危ない時にその人物の本性が出来る。」

全員を見て俺は言い放つ。

「つまりお前らは、我が身可愛さに仲間を捨てるような薄情な奴なんだよ。」

「貴様!?」

「それはちょっとと言い過ぎではないか？」

流石にこの発言にはポン帝も口を挟む。

「俺が話してんだ。話に割り込むガキども。手すら上げてないテメエらに発言権はない。ちなみに女帝様よ、テメエは3回目だつて自覚ねえの？ 流石に3回目は看過できねえよ。」

俺は上着を脱ぐ。

「ペナルティだ。話すだけ無駄だからな。連帶責任で全員俺の後ろを走つて付いて来い。この話の続きはその後だ。」

俺はトップスピードで走り出す。

他は慌てて走つて付いてくる。

大丈夫かな？

俺の言いたい事を理解してくれてるといいんだけど。

そう思いつつ時計のタイマーを6時間にセットした。

26話／1日目午前／その式

あれから、ずっと走り続ける。

タイマーは後1時間残ってる。

大体2時間くらいした頃からか？

まずはスタミナのない人間チームが崩れ落ちた。

ウマ娘の方はまだ余裕そうだった。

人間達はよく根性について来たよ。

4時間経つたあたりから、ウマ娘の方も息切れが目立ちだした。

俺？

全く息切れすらしてないが？

「はあ、はあ、はあ、アソツほんと人に人間なのか怪しいぞ……。」

「あのスピードを4時間も維持してるのよね……。」

「も、ムリ……」

「俺も流石についていけねえよ。」

人間達は、木陰に休んで貰つてる。

ま、最初だし3分の1で許してやろう。

「あらあ？ ウマ娘の方々が人間に負けるのですか？ 俺はまだまだ余裕ですか？ もう息切れしたのですか？」

少し煽つてやる。

ウマ娘という存在自体がかなりの負けず嫌いだ。

少し煽つてやればすぐに闘争本能を剥き出しにしてくる。

見た感じ余裕そうなのは、オギヤリストとポン帝、寝坊助か？

万年3位と鼻血ブーと女帝様は辛うじて、他は一杯一杯か？

「人間にスタミナで負けるなんて、『私最強なんで』って胡座かいて、練習サボつてんじゃないのか？ ペース上げるぞ付いて来い。」

俺はギアを2段回上げる。

その瞬間に余裕組の顔が引き攣り、一杯一杯組の顔が絶望に変わる。

余裕組は離れないように必死に付いて来るが、一杯一杯組は徐々に離れていく。

「おい、朝の話聞いても何も感じなかつたのか？　仲間を見捨てるのか！」

俺からしたら余裕すぎだから、一杯一杯組の2人である、男女第2と逆噴射を肩に担ぐ。

「仲間が倒れそうになつてんだろ？　後ろから押したり、背負つてやつたりしろよ。薄情な奴らだな。」

俺は2人に負担が掛からないようにする。

だがペースはそのまま走る。

「付いて来いよ。2人担いだ俺に負けるとか有り得ねえだろ？　が。さつさと付いて来い。」

時計を見ると後、30分になつていた。

「よし、ペース上げるぞ。」

さらにギアを上げる。

「諦めたら更に時間追加な。」

それを聞いて、必死に付いてくる。

俺の後ろでは、肩を貸して一緒に走る者、スタミナを回復させるためだろうか、交互に背負いながら走る者、励ましながら背中を押す者に分けられていた。

そうだ。

これは普通のトレーニングではない。

軍隊式というのが入る。

仲間の大切さを学ばせ、協力し合うというのを覚えさせるトレーニングだ。

これは後々にいいライバル関係にもなるし、お互いに切磋琢磨できる仲になる。

ピピピッ！　ピピピッ！

そう思いながら走つているとタイマーが鳴つた。

「よし、朝はこれで終わりだ。次は昼からだ。昼は14時から始める。時間には絶対に遅れるなよ？」

26話／1日目午前／その参

「はあ、はあ、はあ、もうムリ……。」

誰が言つたかすら認識できない。

私達は荒い呼吸のまま、芝の上に仰向けに寝転がる。

「ていうか、2人揃いで息切れすらしないなんて……ウマ娘以上」

「おーい、大丈夫か？」

トレーナーさんが呼んでる。

「これが大丈夫に見えますか？」

「すまん。俺らもヤバかつたからなあ。」

「それより午前中の反省会を朝食を取りながらしましょう。」

東條トレーナーが言う。

「でも、食堂は閉まってるんじや？」

「彼が置いていったわよ。」

「いつの間に？」

東條トレーナーが指を差した方向には大きな釜が4つあった。

そこからは、美味しそうな匂いが漂ってくる。

「疲れて固形物がキツいだろうからって、味噌汁とおじやを置いていったわよ。全員で食べなさいとね。」

沖野トレーナーと東條トレーナーを除くトレーナー2人で配膳していた。

「さ、食べましょう。」

グラウンドの端で全員で輪になつて食べ始めた。

「んじや、まずはスペ何で遅れた？」

「すみません……一回起きて二度寝してしまいました。」

「なるほどな。」

「本当にすみませんでした!!」

「スペシャルウイークそれは違うぞ。最後に部屋を確認しなかつた私の責任だ。」

会長が頭を下げた。

「会長さん!?」

「それを言つたら、年長者である私達の責任ですよ。」

お互に悪いの応酬が繰り広げられる。

「そこまでよ。それなら役割を決めましょう。最後に部屋を確認する者と、起こす係をね。」

「あ、起こすならあたしがやりたいなく、なんて……。」

「ナイスネイチャ、君がやるのか？」

「いやあ、結局はターボとマチタン起こさないといけないから、どうせならやろうかなって思つて。」

「そう、なら適任ね。頼むわ。」

「わっかりましたー！」

元気よく答える。

「なら、部屋を確認するのは、全員でつて事でいいわね？」

「はい！」×11

「スマートファルコン少しいいか？」

「はい！　いいですよ！」

「君のトレーナーは…………本当に人間なのか？」

「そうですけど…………どうかしましたか？」

その言葉に全員がギョッとする。

「いや、嬢ちゃん流石に有り得ねえだろ？」

「むしろ口ボツトつて言われた方がしつくりくるが。」

「むしろサ○ヤ人？」

「2人も坦いで速度を落とさずに走れるのがおかしいのよ!?」

「いや、そもそもウマ娘に走りで勝つて方がおかしいよな?」

「「「それな!!」」

トレーナー4人が叫ぶ。

「それはそうとしてエアグルーヴ、昨日今日と君らしくない。」

「すみません、昼からは切り替えますので……。」

エアグルーヴ先輩少し雰囲気が暗いなあ。

話し合いはあれから少しして終わつた。

ゆつくりしていると、人外トレーナーが何処から持ち出したか分からない日本刀5本でジャグリングしながら私たちの前に来た時は、度

肝を抜かれた事については言うまでもない。

26話／午後／

午前の激動を終え、昼からは座学とした。

まあ、ジャグリングの件については、このあとに理事長と緑の悪魔からお叱りを受けることになつてゐる。

「さて、座学もこの練習のうちの一つだ。」

全員は俺の方に顔を向けてはいるが、耳を絞り少し尻尾を巻いてゐる。

つまりは俺に対しても怯えている。

「そんなに怯えんなつて、お前らがやることやつて、俺の言つたことを守つてくれれば怒らねえよ。んで、次の座学はなにするかわかるやついる？」

尋ねると控えめに、寝ぼすけが手を挙げた。

「はい、あの、軍隊の歴史とかですか？」

おつかなくもビビりながら言つてきた。

「へへへ、そんなに怯えるなよ。俺が傷ついちゃうだろ？ 近くも遠いって感じだな。」

次にグラサンが手を挙げる。

「戦史についてか？」

「お、御名答！ 君たちには『何故戦争が起くるのか？』と『軍隊は何故あるのか？』つてのを知つてもらうよ。」

俺は手を出して、指を一つ挙げる。

「まずは、軍隊が何で存在するかについてだ。理由は君たちに聞いて見るとして、簡単には自国の防衛だね。何で自国の防衛として必要なのかわかる？」

俺は全員を見渡す。

ポン帝が手を挙げる。

「他国からの脅威を防ぐためでは？」

「お、そしたら、他国の脅威とは何か分かるか？」

「侵略や戦争だな。」

「ふむ、大きくはそれもあるが、もう一つあるのは分かるか？」

いつちばくんが手を挙げる。

「確かに、宗教でした！」

「お、よく分かつたな。そうだ。宗教だ。宗教つてのはコレが中々バカにできないんだよ。信者を増やすことで勢力も増すし、熱心な信者にすることでの為に、信仰のために戦う兵士の完成だよ。信仰のため、善行の為には死をも恐れないバケモンの完成だよ。」

俺は一息入れる。

「歴史の授業で聞いたことはないかな？　日本で言えば即身仏とか、聞いたことないか？」

「あります！」

元気よく全員が答える。

「いい返事だ。なら、その即身仏になる為に苦行をするのだが、途中で逃げ出したら、関係者に消されるのは？」

「え？」

全員の目が点になる。

「コレは知らなかつたかく、マジだぞ？　宗教に身を捧げると言うことはこう言うことだ。他の宗教は知らんが、テンプル騎士団とか聖ヨハネ騎士団とか海外ではあるんだぞ？」
「その騎士団は聞いたことがあるな。」

ポン帝が言う。

「お前は一時期海外にいたんだな。どんな集団が分かるか？」

「慧可断臂、自身の行動に疑問を持たない、そして信仰のため邪教徒は罰する。聞いていて凄まじい方々の集団と聞いている。」

「そうだ。話し出すとキリがないから、簡潔にする為に後に回す。次だ。」

そして、次の話題に入る。